

Stage Five

「聖なる島」

「おまえがロシユフォル教会大神官フォーリスか。

神聖ゼテギネア帝国に逆らい続けた大罪人、邪教徒の親玉、難民に紛れた反逆者の逃亡幫助罪、反逆者の隠匿幫助罪、これだけあれば、死刑一度では足りんな」

面頬の下から響く声はもつと遠いところから聞こえてくるようだ。漆黒の鎧は闇の色で、近づくとわずかな異臭が漂う。隙間からのぞく赤い光、それが目の光であると言えよう。

しかしフォーリス・クヌーデルは臆すことなく彼の前に立った。神聖ゼテギネア帝国第一皇子ガレスの召喚に応じ、たった一人でアヴァロン島最北の町、アムドに赴いた。

「どうした？ さしもの大神官も恐ろしさに言葉を失ったか。それとも大神官殿は俺にかける言葉などお持ちではないか？」

「いいえ、そのどちらでもありません。あなたは確かに私などには想像もつかないような力をお持ちのよ

うですが、そのために深い孤独に陥っていらつしやいますから。私はあなたに哀れみを感じはすれ、恐ろしいとは思いません」

「哀れみだと?! この俺に知ったふうな口を利くな。哀れなのはこの俺に殺されるおまえの方だ！ ふふん、何でいまさらアヴァロン島にと言いたそうだな。貴様らはずつと帝国に忠誠を誓わなかった。だが貴様らごとき石ころ、わざわざ踏みつぶしてやるまでもなかつたということよ。今回はたまたまだ。俺の行く先にたまたまおまえがいた。目障りな石は踏みつぶしておくに限る」

その後、フォーリスの首だけが大聖堂に送りつけられ、ガレス皇子は改めてロシユフォル教会にゼテギネア帝国への服従を迫ったが、教会はフォーリスの葬儀と次の大神官任命までの空白を理由に回答を引き延ばした。

だが次の犠牲者が出るのも時間の問題であった。

「カノープス、バインゴインの様子を偵察してきてくれ。片づけられるものならば片づけてもいい」

「おう。エレボス、行くぞ」

三日間の船旅にそろそろ我慢も限界らしいグリフォンは嬉々として飛び立った。

ゼノビアを発つて三日目、白竜の月十八日、船はもうじぎアヴァロン島に着く。幸い風と天候に恵まれ、船に酔う者もいたが、おおむね順調な航海だった。

話を聞いていたギルバルドが黙って残る飛行魔獣を甲板に並べて鞍を置いた。ロギンスⅡハーチとニコラスⅡウェールズもそれを手伝い、皆のあいだににわかには緊張感が増してきた。魔獣たちも興奮したように首を振る。

そこへカノープスが急いで戻った。

「片づけるなんてとんでもねえ。グリフォン四頭にドラゴンが五頭、騎士に狂戦士までいる。がっちり守つてやがるぞ」

「兄さん、つけられたようよ」

「何だつて？」

「いいえ、帰つていったわ。こちらの船を偵察に来ただけのようね。レイブンがグリフォンに乗つてた」

「一人だったか？」

「ええ。でも様子を探るには十分な距離だったわ」

「リーダーだけ集まれ！ 私は船長に話を聞いてくる。楽に上陸させてもらえそうにはないな」

だが、帝国軍の話をすると船長は寝耳に水といった顔をした。

「八日前にバインゴインを出た時には帝国軍なんていなかったんだ」

「アヴァロン島にはディアスポラからも定期船が出ていたな？」

「ああ、一日ずれているがね。どつちも片道三日だ。だがそつちのことまで責任は負えないよ」

「そうだな。帝国に先を越されたのだろう。いまさら、アヴァロン島に何をしに来たのやら」

グランディーナが甲板に戻ると皆が船倉から上がってきて賑やかだった。その一角にリーダーたちが集まっている。彼女は真ん中に進んだ。

「帝国軍がバインゴインにいる。さっきのレイブンの偵察から考えても我々の到着を待ちかまえていたと考えていいだろう。上陸前から戦闘になる。覚悟しておけ。」

カノープス、できるだけ詳しく敵戦力を話せ」

「港に陣取つてるのがドラゴン三頭とブラックドラゴン二頭、それにグリフォンが四頭、魔獣はそれだけだ。あとは騎士、狂戦士、槍騎士、レイブン、魔術師、忍者、敵将がわからなかったが、そんなところだ」

「どこかに隠れているのじゃないのか？ それとも魔術師の一人か？」

「そうかもしれないねえが一目見てそれとわかる奴はいなかったな」

「敵将がわからないとやりにくいかもしれない。

ライアン、私とあなたのドラゴンがまず降り、五頭のドラゴンを引き受ける。敵の動き次第で私も動く。気をつけろ」

「承知」

「ギルバルド、ニコラス、ロギンスは魔獣を連れ、魔術師、魔法使い、人形使いを分乗させろ。魔術師たちはドラゴンと魔獣をたたけ。ギルバルドたちはアッシュと合流しろ」

「わかりました」

「アッシュ、騎士とカノープス、カリナを指揮して続いて上陸。騎士と狂戦士、レイブンを全部引き受けてもらいたい。」

ウォーレン、こちらの援護も忘れるな」

「承知しております」

「デネブとパンプキンヘッドは自由に動け。あの南瓜を落とされるとかなり驚くからな」

「あーら、ただでは落とさないわよ。使ったらカボ

ちゃんたちが頭なしになっちゃうんですもの、代わりに南瓜をいただくかなくちゃね」

「あいつら、頭なくても平気なのか？」

「南瓜ですもの」

「なら南瓜ぐらい、すぐに補充できるだろう」

「南瓜なら何でもいいってわけじゃないの！」

その短いやりとりに皆はデネブの連れ歩いているパンプキンヘッドたちを思い浮かべた。身体は痩せていて頭の南瓜がやたらに大きい。シルキィ||ギユンター、マンジエラ||エンツォ、それにフィーナ||タビーの三人娘がすっかり玩具扱いされている。不思議なのは彼らが言葉をしゃべらないものこのちらの言うことがわかっていて自分の意志も持っているらしい、ということだ。

「ポリーシャ、槍騎士と女戦士は魔術師を狙え」

「了解しました」

「戦士たちは最後に上陸、マチルダ、ミネア、エオリア、ユーリアは船で待機だ」

「はい」

「バインゴインが見えてきたな。行くぞ！」

グランディーナが真っ先に船を下りた。

続いて四頭のドラゴンとライアンが下り、その上空

をギルバルドラに率いられた飛行魔獣と魔法使いたちが越えていく。

最初に船を下りたのはサラマンダーのプロミオスだ。その吐き出す炎の大きさはドラゴンの比ではなく、レッドドラゴンさえ凌駕する。しかし五頭のドラゴンとブラックドラゴンはプロミオスの炎にも怯まなかった。負けじと火と毒ガスを吐き散らし、その後からドラゴンたちを狙って魔法が飛んでくる。

「敵将は誰だ?! 私は解放軍のリーダーだ! 部下に隠れて立ち会う気はないか?!」

だがその挑発に応えはない。

グランディーナを狙って帝国軍が殺到し、集結したところにウォーレン、グレッグ、シェイクが強力な魔法をたたき込んだ。

遅れじとアッシュたち騎士が船を下りる。

最後に戦士たちも戦いに加わった。

グランディーナは敵将を求めた。

だがカノープスの言うとおりで。

解放軍と帝国軍が全面的にぶつかり合うことになっても帝国軍の動きに変化はない。

否、最初からそんな者はいなかったのだ。

人数では解放軍の方に分があつた。徐々に帝国軍を

押している。

だが降伏を叫ぶ者はない。

「グランディーナ!!」

「来るんじゃない、ユリア!!」

呼ばれるよりも速くグランディーナは察した。

突然、戦場に現れた黒衣の騎士、兜も鎧も籠手もすね当ても黒ずくめで全身を覆い隠した黒騎士の姿を。

彼は手には両手持ちの大斧を構え、字を書くような動きで振りかざした。

彼女はとつさに手近な一人の首根つこを捕まえて放り投げる。

それがカリナ、ストレイカーだったと知ったのは後のことだ。

「みんな、逃げろ!!」

間に合うはずがなかった。言うより早く敵も味方も巻き込んで魔法陣が出現し、そこにいた者に暗黒の力をたたきつけたからだ。

全ては瞬きする間の出来事だった。

魔法陣はすぐに消滅したが、骨の折れる音がはつきりと聞こえ、犠牲者は倒れた。

グランディーナが振り返ると黒衣の騎士の姿はなく、悲鳴が港中を覆っていた。

「マチルダ！ ミネア、エオリアも来てくれ！」

見境なく魔法陣に巻き込まれた者、そこに解放軍と帝国軍の別はなかった。むしろ、どういふ魂胆かわからないが帝国軍の方が犠牲者が多かつたぐらいだ。

だが血の海の真ん中に沈んでいたのは解放軍の戦士の一人だった。

「ヴィリー?!」

呼びかける声も空しく、若者は事切れている。その顔は突然、襲った攻撃のことなどまったくわかっていなかったようだが、死を自覚した恐怖に歪んでいた。

その周りの怪我人も重傷者ばかりだが、リスゴーⅡブルックとシモンズⅡイルジューグラのほかは帝国兵のようだ。

すつ飛んできたマチルダⅡエクスラインたちと帝国軍の司祭二人が協力して怪我人の治療に当たり出すと、もはや戦いを続けようという者はいなかった。

「アルベルトは無事か?」

グランディーナはヴィリーⅡセキを置いて立ち上がった。その唇の端が歪んでいる。前面は血だらけだが、あの魔法陣の外にいたので傷は負っていない。

「はい。俺はランスロットさまに助けられて」

「あなたはフェルナミアの出身だったな?」

「そうです。ヴィリーも一緒でした」

二人ともまだ幼さの残る顔立ちだ。ヴィリーの死に顔にアルベルトⅡブラッドフォードはすっかり泣き顔になった。元帝国兵だったという負い目が二人を解放軍に参加させた。だが運命の悪戯はこんなところで生死を分かつ。

「あなたに頼みがある。ヴィリーを故郷に連れていつてやってくれ。旅費はウォーレンからもらえ」

「わかりました。でもまだ終わっていないのに帰りたいありません。俺はまた解放軍に戻ってきてほしいんですよね?」

アルベルトがますます涙声になり、ランスロットが慰めるように肩に手を置いた。

だが二人に背を向けたグランディーナの声音は思いがけず冷たい。

「戦争ごっこは終わりだ。帰れ。もう十分、戦争は体験しただろう。次に死ぬのはあなたかもしれない。」

ヴィリー一人では足りないか?」

「グランディーナさま!」

彼女はその場を足早に離れていった。

「ビンセントとバイソンはいるか?」

「はい」

怪我をした二人が呼ばれてランスロットの前に立つ。その姿にアルベルトは息を呑んだ。

「君たちもヴォルザーク島のダスカニアの出身だったろう？ アルベルト一人では気の毒だ、一緒に帰ってあげてくれないか？」

「ええっ？」

バイソンⅡロイスターは驚いた声を上げたが、ビンセントⅡハンナはすぐに頷いた。血の海に横たわるヴィリーの死体、それが解放軍で初めての死者であったことが彼の決心を促したらしい。

それでバイソンと、愚図っていたアルベルトも現実を見直したようだ。

「ヴォルザーク島の元帝国兵、という素性があって四人はずっと仲が良かった。そのうちの一人が死に、ヴィリーとアルベルトのリーダーだったリスゴーは重傷である。ビンセントとバイソンのリーダーであるガーディナーⅡフルーフは無事だったが、近くまで来ると二人を促すように頷いてみせた。そしてビンセントとバイソン自身も負傷した。」

「これはわたしの独断だが彼女は反対するまい。君たちも帰りたいまえ。ここにいるだけが戦いじゃない。ゼノビアの復興も必要だ。ヴォルザーク島もシャロー

ム地方も、人の手は借りたいだろう。君たち若者の力はどこでも必要になる。武器を取らなくともそれも戦いなんだ」

「馬と馬車を買うといい。馬車は扱えるのだろうか？ ランスロットの言うとおり、君たちの力はどこでも必要とされるし、馬車があれば、もつとたくさんの物を運べる。目立たないことだが、わたしたちの代わりにそうしてくれる者は必要だ」

ガーディナーが金貨の入った小袋を差し出した。とうとうアルベルトはそれを受け取った。泣き出した彼にランスロットもガーディナーもかける言葉がない。ビンセントとバイソンもしよげかえっていた。

ランスロットはヴィリーの目を閉ざしてやった。一方、ヴィリーの側を離れたグランディーナはまずウォーレンを捕まえた。

「負傷者と傷の具合をマチルダに出させろ。何人かはここで養生しなければならなさそうだ。」

アレックは無事か？」

「ええ、運良く外れました」

「バインゴインのロシユフォル教会に行つて事情を説明しろ。重傷者を預かってもらいたい。それに棺も幾つか譲ってもらいたいとな」

「帝国兵もですか？」

「当たり前だ」

「すみません、わかりました！」

アレックⅡフロレンスは大急ぎで町の方へ走っていった。港からもロシユフォル教会のものと思われる尖塔はよく見える。聖地アヴァロン島ならではだろう。手の空いていて傷を負っていない者はマチルダたちを手伝わせろ」

「承知しました」

ウオーレンの応えを待たずに彼女は次へ歩いていく。

「ギルバルド、魔獣は大丈夫か？」

「先ほどの攻撃は人が集まっているところを狙ったようです。こちらは戦闘での負傷以外はありませんが、ユーリアがなだめて手当てもしてくれました。先ほど彼女があなたを呼ばれたようですが、何かありましたか？」

「後で話す。さっきの攻撃で負傷者がたくさん出ている。マチルダたちを手伝ってやってくれ」

「ロギンスタちを行かせましたよ」

「手際がいいな」

そう言ったもののグランディーナは笑みなど浮かべなかった。足早に皆のあいだを抜けていく。

だが彼女の求める者は現れなかった。あるいは口もきけない重傷者の一人かもしれない。バインゴインを準備していた帝国軍のリーダーがこの期に及んでも名乗り出ないのだ。

とうとう彼女は無傷の狂戦士を一人、とつ捕まえた。「あなたたちに、ここで我々を待つよう命じたのは誰だ？ 船が近づいたら偵察するよう命じ、我々を迎え撃つよう命じたのは誰だ？ 誰がこの戦いを指揮していた？」

「俺たちはガレス皇子と一緒に来た。だが皇子は六日前にアムドに向かい、俺たちはバインゴインに残るよう命じられた」

「六日もバインゴインにいたと言うのか？」

「そうだ。反乱軍が必ず来る。ここで待てと言われる。だがよくわからない。よく覚えていないんだ。ディアスポラから船に乗ったことは覚えているんだが、ガレス皇子が皆を集めて話されてからはよくわからないんだ」

「ガレスの副将は？」

「いない、と思う。だがそれもわからない。俺たちは自分で考えて行動していたわけではない」

「わかった。ところであなたたちはこれからどうす

るつもりだ？」

その狂戦士は軽く肩をすくめた。

「残った者で話し合ってからだ。怪我人も多い。だがあれがガレス皇子ならば、どうして俺たちを狙ったんだ？ あれは本当に皇子だったのか？」

「私を知るものか。戦う気はないのだな？」

「頭が混乱している。少し考えさせてくれ」

「では仲間にごう伝える。あなたたちが帝国に戻るならば私は止めない。さつきゼノビアからの船が着いたばかりだ。好きなところへ行くがいい。だが武器は預からせてもらおう。功名心に駆られていきなり襲われるのはごめんだからな」

「そんなことはしないよ。だが俺たちが帝国に戻ったら、また敵になるぞ。それでもかまわないのか？」

「敵？ あの程度の腕で笑わせるな」

狂戦士はとりあえず腰を上げた。仲間たちにいまの言葉を伝えなければならなかった。

「グランデイナー、あなたも見たでしょう？ 一瞬だけだったわ、黒ずくめの騎士が現れて攻撃した。帝国軍もいたというのに。それとも彼は帝国の人間ではなかったのかしら？」

「違う。奴は帝国の人間だ」

皆はまだ動き回っている。

青ざめた顔のユーリアはギルバルドに代わって魔獣の番をしていた。そのなかにはちやつかり帝国軍のグリフォンも混じっている。

「あなたは彼を知っているのね？ あれは誰？」

グランデイナーは黙り込んだ。その顔がいつもよりきつい。人を寄せつけない壁がいつにも増して高いようにユーリアには思えた。

「後で話す。少し、独りにしてくれ」

案じるような眼差しも彼女はうるさがついているようだ。ユーリアは人に知られぬよう、ため息をついた。

バインゴインの港を離れると狭い砂浜に下りられる。グランデイナーがそこへ行くと、待ちかまえていたように一人の人物が現れた。含み綿を入れて変装したアラディールカプランだった。

「アヴァロン島の現在の状況はどうなっている？」

「まずロシュフォル教会大神官フォーリス・クヌーデル殿が五日前に処刑されました。ガレス皇子の召喚に応じてアムドに行かれ、そのまま殺されたそうです。首は大聖堂に送り返されましたが、ガレス皇子は改めてロシュフォル教会のゼテギネア帝国への服従を迫ったとか。大聖堂はまだ回答を渋っているようです」

「フォーリスさま！」

一瞬空気が張りつめた。グランディーナは刀の柄に手をかけたが、しばらくそれを震える手で握り締めていただけだった。だがアラディはそんな彼女に言葉をかけることができなかった。

「ロシユフォル教会大聖堂は無事か？」

「ええ、いまのところ。帝国はアムドとバインゴインを抑えています。がほかの町には駐留していません」

「アムドにも帝国軍がいるのか？」

「いいえ。わたしの知っている限りではアムドにいるのはガレス皇子だけです。兵は全てバインゴインにいました」

「アムドにガレスを確認したのはいつだ？」

「二日前です」

「ここはもういい。カストロ峡谷に向かってくれ」

「承知しました」

アラディが先に去るとグランディーナはその場に両膝を落とした。柄からはとうに手を離している。その手を砂地に落として、彼女は二度、三度と両拳をたたきつけた。

「フォーリスさまが、ガレスに——」

こらえきれない嗚咽が漏れた。涙が一粒、二粒と砂

に吸い込まれ、彼女はしばらくそうして動けなかった。

グランディーナが皆のところに戻るとかなりの用事が片づいていた。

マチルダが姿を認めて近づいてくる。疲労の色が濃いのは怪我人の多さだけではないだろう。

「怪我人の報告をよろしいでしょうか？」

「頼む」

「亡くなられたのはヴィリーだけです。ただ、リスゴーさん、シモンズさんが重傷を負われて、しばらく動けないと思います。お二人ともこちらのロシユフォル教会で診ていただけよう、お願いし、先ほどお連れしました。ヴィリーの棺もお願いしましたが、ゼノビアに戻る船は明日になるそうなのでアルベルト、ビンセント、バイソンは今日はロシユフォル教会に泊まるそうです」

「グランディーナ、ビンセントとバイソンには、わたしの判断でアルベルトとともに帰るよう言った。かわらないだろうな？」

「あなたに礼を言いこそすれ咎める筋合いのことじゃない。ありがとう、ランスロット」

思わぬ礼にランスロットの方が照れた。

「ほかに怪我をされたのはビンセント、バイソン、オーサ、カリナ、ユーゴス、ゲリー、デューク、エドウィン、ブロンソン、それにスティングさんですわ」
「ランスロット、皆を集めてくれ。これからのことで話がある」

「わかった。だが君も先に着替えてきたらどうだ？
血糊が乾きかけて、すごい格好だ」

「余計なお世話だ」

ランスロットもこれには肩をすくめたが黙って皆を呼びに行った。これを見たマチルダは咎めるような視線をグランディーナに向けたが彼女は意に介さぬ顔だ。やがて皆が集まってきたが、ヴェリーの戦死のことは誰もが知っているようで明るい顔ではなかった。勝つたのか負けたのか、わからぬ後味の悪さもあつたのだろう。

「ご苦労だった。これからのことを話す前に次の者に除隊を命じる。すでにここにいないが、ヴェリー、アルベルト、ビンセント、バイソン、リスゴー、シモンズ、それにゲリー、デューク、エドウィン、ブロンソンだ」

なぜ、と訊く者はなかった。名を呼ばれたなかで元気なのはアルベルトだけだ。

「旅費はウォーレンからもらえ。以上だ。わかつていると思うが事情が変わった。帝国軍がアヴァロン島に来ていたのもそうだが、我々が訪ねるつもりだったロシユフォル教会大神官フォーリスさまが五日前に処刑された」

「それは本当ですか?」

「確かな情報だ」

「ああ、何てことでしょう」

よろめいたマチルダをさりげなくアレックが支えた。だがグランディーナは話し続ける。

「良くない知らせが、もう一つある。さっきの攻撃で気づいた者もいるかもしれないが、ガレスがアヴァロン島に来ている」

「やはり、あれはガレス皇子のイービルデッドでしたか?」

黒騎士ガレスはゼゲネア帝国女帝エンドラの弟で一つ違い、黒騎士の異名を取るとおり熟達した斧の使い手で、賢者ラシユデイにも師事して魔法も使いこなす。帝国内でこれといった地位にあるわけではないが、女帝の弟であることやラシユデイとの親交などは帝国軍最高司令官、ヒカシユールウィンザルフ大將軍にも匹敵する影響力を持つと考えられている。

さらにゼテギネア帝国の代になつてからずっと素顔を出したことがない。いつでも全身を鎧兜に包んでおり、うっかり素顔を見てしまった部下や小間使いが、問答無用で斬り殺されたという噂もあつた。血を好む残虐な性格で、その冷酷さは味方にさえ恐れられているというが悪い噂は誇張して伝わりやすいものだ。

「おそらくそうだろう。だが発動したのはほんの一瞬のことだ。ガレス本人ではない可能性もある。以上のような事情から、これからの行動を次のように変更する。私は大聖堂に寄つてからアムドに向かう。アツシュ、ランスロット、ウォーレン、ギルバルド、カノープス、一緒にアムドへ来てくれ。こちらの指揮はアレック、あなたに任せる。怪我を負つた者はそのあいだに養生してもらう。名を呼ばなかつた者もマチルダたちの手伝いをしてくれ。何か質問はあるか？」

「アムドにいるのはガレス皇子だけだということですか？」

「そうだ」

「大聖堂にはなぜ寄る必要がある？ そなたの口調から察するに回り道ではないのか？」

「そうだ。だがお会いすることはかなわなくても、せめてフォーリスさまの墓前に詣でたい。これは私の

わがままで、あなた方は街道を通つて、トマヤングで合流しよう」

「何、水くさいこと言つてるんだよ。どうせアヴァロン島まで来たんだ、みんなで墓参りしていけばいいじゃないか」

「大聖堂を経由すると二日、余計にかかる。少し強行軍になる」

「何言つてんだ。グリフォンでもワイバーンでも使えば済むだろう。おまえ、頭に血が上つてるぞ」

「そうですね。さつき帝国のグリフォンもユーリアが手なずけてくれましたから、ワイバーン二頭とグリフォン三頭を連れていつでも問題はありますまい」

「わかつた」

「あの、私も一緒に行かせてください。ほかならぬフォーリスさまの墓前になら私も詣でたいのです」

「怪我人はどうするつもりだ？ あなたが離れれば、こちらにはミネアとエオリアしかないない。バインゴインのロシュフォル教会を当てにするか？」

「それは」

マチルダが口ごもる。さすがにこれだけの怪我人を抱えていては誰も彼女に同意できない。だが助け船は思わぬところから現れた。

「私で良ければ手助けさせてもらえませんか？」

声をかけたのは帝国軍の司祭の一人だ。

「さつき助けてもらったお礼です。あなたが好きなところへ行っていていいと言ったと聞かされたので、このまま一緒に行かせてもらえたらと思つて」

「モームさん、本当ですか？」

マチルダの顔が喜びに輝いた。

モームと呼ばれた司祭は祖国への裏切り行為に、それほど後ろめたさは覚えていないようだ。

「代わりに、と言い出すんじゃないのか？」

「ええ、ちよつと。でもそれはアヴァロン島を離れる時でいいですか？」

「いま話せ」

「わかりました。あなた方はこの先、ディアスポラを通りますよね？ その時に監獄長をやらされているノルンさまを助けていただけませんか？」

「ノルンというのは何者だ？」

「ノルンⅡデアマートさまは帝国教会の法皇だつた方です。それが一ヶ月くらい前にディアスポラに慰問と称して行かされて、そのまま監獄長にされてしまつたんです。法皇位も剥奪されました」

「政治犯ばかり閉じ込めた監獄に慰問で、法皇を監

獄長にか」

「そうなんですよ！ どう考えてもおかしいでしょう？ でもノルンさまがラシュデイさまを批判したらしいつて噂が立つてまして」

「帝国教会の法皇と言えば、ロシュフォル教会の大神父に通じる地位だ。それがラシュデイを批判したら左遷というわけか」

モームは頷いた。言動と容姿がさっぱりした印象を与える。色気はないが裏表もない性格の女性のようなだ。

「良からう。ディアスポラは次の目的地だ。大監獄の解放もやぶさかじゃない。念のため、あなたには監視をつけるが、それで良ければ頼む」

「任せてください。怪我人は私たちの方が多かつたんですから」

「ポリーシャ、そういうわけでああなたが人選して交替でついでいてくれ」

「わかりました」

「よろしくお願いします。私はモームⅡエセスといます」

そう言つてモームは頭を下げたが、生真面目なポリーシャⅡプリージは監視する立場としては拍子抜けした顔だ。

「マチルダさんが行くのなら、私も一緒に行つていかしら？」

「ユーリア、遊びに行くんじゃないんだぞ」

「それぐらいわかつてゐるわ。でも行きたいのよ。グリフォン四頭はニコラスさんとロギンスさんが面倒みてくれるし、ただ待つてゐるのもつまらないもの」

「いいだろう。あなたは来るのか？」

「あたし？」

その言葉に皆が思い出したようにデネブを見た。魔女の方も自分に話を振られたことが意外そうな顔だ。

「行つてらっしゃい。あたしは大聖堂にもガレス皇子にも興味ないもの」

「わかつた」

グランディーナが立ち、話を一方的に打ち切る。

ユーリアがその後を追いかけて、出かけることになつたアッシュたちもそれぞれ立つた。

「皆さん、お気をつけください。無事のお帰りをお待ちしています」

初めて大役を任されたアレックはかなり緊張した表情だ。もつとも彼でなくても相手がガレス皇子とあれば誰もが八人の身を案じないではいられないところだ。八人は三頭のグリフォンと二頭のワイバーンに分乗

して次々にバインゴインを飛び立っていった。

「それで、どうしてわたしと君とエレボスに乗つてゐるのか訊きたいんだが？」

「大聖堂まで一人旅つてのもつまらねえだろうが。グランディーナはユーリアとクロヌスに乗つちまひやがつたし、アッシュとウォーレンとマチルダじゃ話すこともないしな」

「それならばギルバルドと一緒になれば良かったじゃないか」

「ふられたんだからしょうがないだろう。いつまでも愚痴愚痴言つてんなよ」

「それで何の話だ？」

「おまえはガレス皇子は見たのか？」

「いや。わたしたちはいちばん低いところにいた。グランディーナの声にアルベルトを引つ張るのが一杯だ。それにたとえ見ていたとしてもガレス皇子のことは知らない。直接見たことがないのにガレス皇子だとは言えないよ、噂どおりの姿をしていてもな」

「優等生の答えだな」

「気に入らないのか。それにそもそも君はわたしとそんな話をしたためにエレボスに乗せたわけじゃない

いのだろう？」

「まあな。凶星だ」

「それならばさつきと本題に入ってくれないか。あいにくと、いまのわたしは君の軽口の相手をしたくない気分じゃないんだ」

「おいおい、まさかおまえまでヴィリーの死に責任感じてるなんて言い出すんじゃないだろうな？」

「しかし、彼を助けられなかったのは事実だ」

「馬鹿言うな。俺は見えていたから言うが、おまえがいたのは魔法陣の外だ。そこから真ん中にいたヴィリーにどうやって手が伸びるって言うんだよ？」

「だがせめて彼をあんな乱戦の真ん中に押し出さなければと思うんだ。そうじゃないのか？」

「違うな。おまえがヴィリーをあそこに連れていったと言うのならともかく、おまえが奴の死に責任を感じる必要なんてないんだ。だがあいつはそうじゃない。戦士たちに最後に下りるように言った。奴らは戦い慣れていないからな、せめてと思っただろう。バインゴインまでじきだ、船を止めれば帝国軍に陣営を固め直す余裕を与えることになる。それを避けて敵将を討ち、とつと片づけたかったんだろう。だけどガレス皇子から不意打ちを喰らわされた。予想以上に速く戦

士たちが戦場に来ちまった。何を狙っていたのかわからねえが、ガレス皇子の攻撃はいちばん多く人間がいたところにぶち込まれた。あいつの狙った敵将もいなかった。あいつはもう、百万も後悔の念にかられている。これは戦争だ。いままでも戦死者の出なかつた方が不思議だなんて言っても通じねえだろうな」

「では君ならば達観できるのか？ ヴィリーと特別、親しかつたというわけではないだろうが、彼の死に心痛めないわけではあるまい？」

「そうじゃねえよ。俺はヴィリーと話したことがある。初めてあいつがヴォルザーク島に来た時、自分は何も知らない帝国兵だつたと言つた。自分たちの頭が殺されて、それでもこのこ戻る気にもなれなくて、奴は無謀にもあいつに斬りかかつただけだ。俺が馬鹿かと言つたら、奴もそうだと認めた。実際、剣はかすりもせず逆に鎧を壊されただけだと言つた。でもそれですつきりして、何年ぶりかで母親の顔を正面から見る事ができて『解放軍に行つてきます』って言えたつて言つた。あいつは来るなと言つた。それが、故郷に帰るのも後ろめたくて、せめて解放軍にいれば胸張つて帰れると思つただらうな。それはアルベルトたちもおんなじさ」

「カノープス、泣いているのか？」

「振り返んな！」

だがすぐに鼻をすすり上げる音が聞こえてきて、ランスロットは苦笑いをした。

「すまない。君は彼らに慕われていたな。達観などできるはずがなかった」

「こんな形であいつらを除隊させたくなかった。それだけさ。振り返るなって言っただろ！」

「ああ、今日は風が強いな」

「あいつは連中には憧れなんだ。無敵の戦女神イシユタルだとヴォルザーク組と娘つ子とで意気投合してたっけな。自分もあんなに強くなりたいて、あいつに言ったら、いなされたがな。だがそれとこれとは話が違う。ヴィリーの死に心を痛めるのと責任を感じるのは全然次元の違う話だ。あいつは奴らをもっと速く帰すことができた。あいつがゼノビアを落としたら帝国の反撃が厳しくなると言っただ。奴らをアヴァロン島に連れてこず、ゼノビアで除隊させれば良かった。あいつはリーダーだ、それができた。逆にあいつ以外の誰にもできなかった。それがリーダーとしての責任でものさ。俺たちが多少、心痛めたところで肩代わりできることじゃねえよ」

「だが君はそんな彼女を支えるのが、わたしたちのすることだと言った。いまの彼女には、それさえ拒絶されそうだがね。そんな思い詰めた顔だ。ところでなぜ、わたしにそんな話をするんだ？ わたしはそんなに物わかりが悪そうに見えるのか？」

「逆だ。ギルバルドはそんなことは言うまでもない。だがじじいどもに話しても意味がないからさ」

「トリスタン皇子がご存命だ。騎士ならば、そうするのが当然だろう？」

「俺はあいにくと騎士道つてやつはよくわからねえが、アッシュが剣を捧げたのはトリスタン皇子じゃなくてグラン王だ。そしておまえはあいつに剣を捧げた。そうだろうが？」

「その気持ちに偽りはないし迷いもない。君にわざわざ言われるまでもない。この戦いが終わるまでわたしの気持ちは決まっている」

「おお、清々しいほどに潔いな。俺の出る幕じやなかったってことか」

「いや、そうでもない。君と話して気持ちが固まった、感謝しているよ。だがいまの彼女にはそんな気持ちも余計なお世話なのかもしれないがね。実際には彼女が我々の手助けなど不要なほどに強い。ゼノビア城で

はあのデボネア將軍に自分の劍をさせなかつたほどだ。帝國四天王と言えば劍の達人であることはよく知られている。なにしろ元のハイランド王国が劍技に優れた国だったのだからな。ヒカシユード將軍を除けば、四天王はその頂点と言つてもいい。確かにデボネアが四天王になったのはつい最近だ。それも同じ四天王とは言つても末席だという話はわたしも聞いた。それでも帝國では五番目に強い劍士のはずだ。そのデボネアをまるで赤子の手をひねるように一方的に倒したんだ、彼女の腕前はわたしの想像を遙かに超えている」

カノープスが口笛を鳴らす。彼にも初対面で地面にねじ伏せられた経歴がある。グランディーナの腕は認めるところだがそれほどとは思つていなかったようだ。「だからユーリアの奴、来たがったのかもな。俺はあいつが来させねえだろうと思つてたけど、あつさり許可しちまつたからな。それにしてもユーリアのお節介なところは誰に似たのかなあ」

「君とギルバルドだろう」
ランスロットが即答したのでカノープスは笑い声を上げた。振り返つたギルバルドはやはり、そんな親友の気持ちを感じているように見えた。

いつもならこういう編制を組んだ時にはエレボスが

先頭を飛ぶ。だがグランディーナが騎乗したのがクロヌスだったので、ランスロットとカノープスを乗せたエレボスは渋々といった様子で最後尾を飛んでいた。眼下に二つの町を認めた後は山中に入った。アヴァロン島は十ほどの島からなる群島だ。本島がいちばん大きく、ほかは小島である。本島はその八割が山岳地帯で占められる火山島で、アヴァロン島と言えば、ロシユフォル教会に温泉が名物だった。

グランディーナとユーリアはクロヌスに乗り、ギルバルドと不慣れなマチルダがプルートーンに乗った。グリフォンは二人乗ると速度が落ちるが、もともとそれほど速くないワイバーンは二人乗せてもあまり変わらないからだ。

「あなたがここに来るのは何年ぶりなの？」

「五年ぶりだ。なぜそう思う？」

「フォーリス大神官さまのお墓に詣でるのにわがままだと言つたわ、個人的にご存じなのかと思つて」
グランディーナが軽く舌打ちをした。

「カノープスの言つたとおり、かなり頭に血が上つていたらしいな。確かにフォーリスさまは知つている。せめて一言、お礼が言いたかつた」

「フォーリスさまにはお気の毒なことをしたと思うわ。だけど、あなた、責任を感じてるなんて言いやしないでしょうね？」

「まさか。たとえガレスの目的が私であつても、そんなことは思わない」

「その言い方も意味深ね。でも訊かないことにする。私が話したいのは別のことだもの。ヴィリーたちのことよ、自覚しているんでしょ？」

「彼の死は私のへまだ。だから戦士たちを帰した。ほかに何かあるのか？」

「私はあなたが解放軍のリーダーになる前、何をしていたのか知らないわ」

「傭兵だ。アヴァロン島を離れて五年間ずっと戦場を求めて明け暮れた。死は日常だ、敵も味方も。いまさら狼狽^{うろた}えたりなどしない」

「ふふ、でもね、あなたがそういう逆説的な言い方をする時は逆よ。フォーリスさまの死もガレス皇子の出現も、どれもあなたの心を動かしているわ。あなたが私たちに狼狽^{うろた}えたところを見せないのはリーダーだから。あなたの動揺が私たちにはもつと大きく伝わってしまうから。違うかしら？」

「だつたらどうした？」

「あなたが戸惑っている理由はもう一つ。ヴィリーの死があなたを動かした。でもあなたにはそれがなぜか、わからないのよ」

グランディーナが沈黙したのでユーリアは話を続ける。静かな声音だが、彼女の声はワイバーンの羽ばたきにも上空の風にも、不思議と負けないのだった。

「あなたはずっと一人だったのね。いいえ、一人ではないとしたのね。戦場で頼れるのは自分だけ、背中を預けられる戦友がいても最後は自分の腕次第、それが戦場だつて言うのは兄さんの口癖。だから私にも少しだけわかるの、あなたが一人でいた理由も。死が隣り合わせならばなおのこと、あなたは五年間、ずっとそんな危険なところにいた。でもそんなあなたが解放軍のリーダーになつたわ。ヴォルザーク島、シャローム地方、イグアスの森、ゼノビア、そしてアヴァロン島、解放軍に加わる人は増えているし、これからも増えるでしょうね、あなたの言うとおり。だけどヴィリーが死んでしまった。あなたはなぜ戦士たちを帰したの？ 腕前が未熟だったから？ この先の戦いは厳しくなる、彼らでは戦い抜けないから？ 違うわ、そんなことは後からつけた理由よ、あなたは本当はこう思っているの。もう誰にも死んでほしくないって」

グランデイナーが戸惑い顔に振り返った。ユーリアはたおやかに微笑んでみせる。

「どう違う？ 腕が未熟だから死ぬかもしれない。そんな者を解放軍に置いておく理由はない」

「いいえ、死んでほしくない理由はそんなことじゃないの。あなたにとつて彼らが仲間だから。あなたはもう一人ではないから。だからあなたは一人でシリウスと戦ったわ。デボネア將軍と戦ったわ。あなたはもう誰にも死んでほしくないと思ってる。誰かが傷つくぐらいなら自分が傷ついた方がましだと思います。それが今回の人選の理由でもあるのでしょうか？」

「ば、馬鹿なことを！」

正面に向き直ったグランデイナーをユーリアは背後から抱きしめた。

「いいのよ、それで。みんなが知らなくても私たちが知ってるわ。私たちがいつもあなたの後ろにいるわ。あなたはもう一人ではないのよ」

ユーリアの腕にグランデイナーは片手を乗せた。だが彼女は何も言わなかった。その手は微かに震えているようでもあった。

やがて一同の視界に大聖堂と付随する灰色の建物群

が入ってきた。ロシユフォル教会の総本山はごちんまりした敷地である。大神官以外の位を置かず、世俗のいかなる国家からも中立を保ち続けた教会に、あるいは最も相応しい形であったのかもしれない。

そこを指してクロヌスが徐々に高度を下げ、ほかのワイバーンとグリフォンも続く。一行が大聖堂の正門前に到着した時、そこは堅く閉め切られていた。

陽が山陰に隠れている。日没はもうじきだ。

「今晚はここで泊まりますか？」

「そのつもりだ。巡礼用の宿泊施設がある」

「魔獣はどうするんだ？」

「中に入れて繋いでおけば大丈夫だと思う。異論はないな？」

「俺は来るのは初めてだ。知ってるなら任せる」

カノープスの言葉に残りの者も頷いたので、グランデイナーが扉に近づいた。

「ここを開けてくれ。フォーリスさまの墓前に弔いたくて来た」

端の通用門が開けられて、年輩の司祭らしい女性が顔を出した。頭に黒い面紗（へくろ）を被っている。

「こちらからお通りを。正門はしばらく開けられませんが」

彼女はあまり見る機会もないだろうに魔獣や有翼人にもそれほど驚いたようではなかった。八人と五頭が門を潜ると通用門はすぐに閉じられ、彼女は粗末な椅子に座り直した。門番、というわけらしい。

「私は墓地に向かう。巡礼用の施設は右手だ。言えば空き部屋を教えてください。先に行っていてくれ」

「ここまで来たのだ。わしもフォーリス殿の墓前に詣でたい」

アッシュがそう言うと、ウォーレンやランスロットも同意した。

「ならば、わたしが魔獣の面倒をみていきましょう」

「俺も残る。辛気くさいのは苦手だ」

ギルバルドとカノープスに手綱を預けて六人は揃って移動した。

彼女ら異邦人に大聖堂は特に気になるような反応はしなかった。行き交う司祭たちは皆、黒い面紗を被り、静かに素早く動いている。面紗がなかったなら、いつもの大聖堂と変わらぬところだ。

墓地は大聖堂の裏手にあり、人気はほとんどない。だが訊かなくともフォーリスの墓は、捧げられた花の真新しさと多さで、すぐにそれと知れた。

地面はむき出しで墓石だけが規則正しく並んでいる。

大陸のロシュフォル教会よりもずっと地味で、それでいて荘厳さを感じさせる光景だ。

グランディーナは墓前まで進むと黙って膝をついた。マチルダ、ユーリアがすかさず俯つたので男性陣もそうせざるを得ない。

マチルダは涙をこぼしていたが、グランディーナは手を組むでなく頭を垂れて微動だにしない。アッシュも同様でウォーレンは手を合わせている。

ロシュフォル教会の大神父フォーリスにはランスロットも面識がない。ただ、彼女が八年前、若くして大神官位に就いた時にその名を知っただけだ。フォーリスは大神官になると、ロシュフォル教会の伝統に従ってゼテギネア帝国への不従を宣言した。潰すのならはその時であつたらうに、女帝エンドラはこれを黙殺し、アヴァロン島には平和が保たれていた。

「あなた方はどちらからいらしたのですか？」

しばらく経つてから一人の僧侶が遠慮がちに声をかけてきた。亜麻色の髪を二本の三つ編みに垂らした若い娘で、やはり黒い面紗を被っている。背はグランディーナより頭一つ分低い。

グランディーナは慌てて立ち上がったが、二人の口から同時に漏れたのは互いの名であつた。

「その声はアイーシャか？」

「あなた、サーラ？」

アイーシャと呼ばれた僧侶は面纱を上げた。まだ年若いミネアよりは年上だろうか。青ざめた顔色が痛々しい。

「久しぶりね。」

それに初めまして、アイーシャ・クヌーデルです」

「初めてお目にかかります。私はマチルダ・エクスライン、司祭を務めさせていた দিয়ে おります。クヌーデルというのはまさか、フォーリスさまの？」

「はい。フォーリス・クヌーデルは私の母です。けれど私たちは皆、聖なる父の子です。あなた方がへりくだられる必要はありません。どうぞ、お気遣いは無用に願います」

「でもフォーリスさまにはお気の毒なことをいたしました。」

「お知り合いですか？ サーラというのはあなたのことですね？」

「ああ。アヴァロン島にいた時に使っていた偽名だ。アイーシャ、私の名はグランディーナ、解放軍のリーダーだ」

「あなたが解放軍の？」

「そうだ。ここにはフォーリスさまの墓参りに来た。明日に発つ」

「ガレス皇子を討つの？」

「そうだ」

アイーシャは周りを見回した。墓地にいるのは彼女らだけだが、彼女はグランディーナに耳打ちした。

「陽が落ちたら鐘楼で待っているわ」

彼女は面纱を下ろし、立ち去った。入れ違いに別の司祭が墓地を訪れ、フォーリスの墓に詣でていく。

「部屋を借りに行こう。簡素だが食事付きだ」

「カノープスたちも待ちくたびれておりましょう」

「なぜ偽名を使っていたのか訊いてもいいかな？」

グランディーナは振り返ってランスロットを見た。灰色の眼差しは冷静だ。

「本当の名を出しては都合が悪い。それに知らなければフォーリスさまに害は及ぶまい、そう考えた」

すっかり陽が沈んで建物の中と陰は暗かった。だが時折すれ違う司祭たちは灯りなしで歩いていく。

「フォーリスさまとはそんなに親しかったのか？」

「恩人だ。だがフォーリスさまはもういない。話しても詮ないことだ。先に行っていてくれ。私はこの責任者に会ってくる。つき合う必要はないぞ」

グランディーナは一人で大聖堂に入っけいき、ランロットたちはギルバルドラと合流した。

次の大神官も決まらず大聖堂はまだまだ混乱のなかであつた。しかしグランディーナが解放軍を名乗るとフォオリスの補佐を務めていたという女性が応対してくれることになつた。

「あなた方の噂はアヴァロン島にも届いております。勝利とご無事をお祈りしておりますわ。ところでご用向きは何でしょう？」

「この先、各地のロシユフォル教会の手助けをお願いすることになると思う。できるだけ、あなた方の手は煩わせたくはないが、助けを求めた時に必ず得られるよう言質^{げんち}が欲しい」

「ご安心を。フォオリスさまからすでにそのような通知は各教会に届いているはずです。遠慮なくお申し出ください。その代わりというわけではありませんが、どうかアヴァロン島からガレス皇子を追い出してください。私たちの願いは以前のような祈りの島に戻ることでだけです。帝国への服従を求め、僧侶を殺すと脅されても従うことはできません。ですが、皆がそのような覚悟を抱いているわけでもありません。恐ろしさに

心が挫け、信仰を捨ててしまふ者も出始めています。嘆かわしいことです。帝国に忠誠を誓うべきだと主張する者もあります。私たちはガレス皇子をお恨みはいたしません。ただそつとしておいてほしいのです」

「ガレスは必ず倒す。じきに帝国軍も追い払う。それを約束しに来た」

「たとえフォオリスさまの命を奪つた方とはいえ、無益な殺生は望みませんが、よろしくお願ひします」
グランディーナは領き、その場を去つた。

「さつきアイーシャは何て言つていたの？」

「陽が落ちたら鐘楼で待つてる」

簡素な食事は食堂でだった。ギルバルドとカノープスがまた魔獣の番に残り、後でユーリアと交替することになつていた。

「アイーシャさんとお知り合いなんですか？」

グランディーナは領き、空にしたお腕を押し出した。「そなたはゼノビアを陥落させたら帝国の反撃が厳しくなると言つたな。ガレス皇子がアヴァロン島に現れたのはその兆候か？」

「違うだろう。ロシユフォル教会が帝国に従わないのはいまに始まつたことじゃない。ガレスの地位を考

えれば、いまさらアヴァロン島に来るはずがない」

「ならば、そなたはなぜガレス皇子が来たと考えているのだ？」

グランディーナは黙し、そのあいだにウォーレンたちもつい耳をそばだてる。ユーリア一人が立ち上がり、食堂を出ていった。

「わからない。心当たりはなくても私の推測など話しても意味はないだろう」

「よもや殿下が理由ではあるまいな？ アヴァロン島に向かわれたのであれば、大神官殿にお目通りを願うのは当然のことだ。その動きが帝国に漏れているのではないのか？」

「否定はしない。だが、いまさらグランの血筋などに帝国はこたわりはすまい。トリスタンの動きは抑えていようがガレスを送り込むほどとは思えない」

「今度はアッシュが黙した。このなかでトリスタン皇子を直接知っているのは彼だけだが、それも二四年も前の話になる。二歳の幼児だったトリスタン皇子がどのような若者に成長したか誰も知らない。神帝グランのこともよく知るだけに、会ったこともない皇子のことを思つて元騎士団長は複雑そうな顔だ。」

「あなた方にあらかじめ言つておく。ガレスの目的

がトリスタンで彼が帝国に捕らえられたとしても私は止まる気はない。あなた方がトリスタンを助けたいと思うのなら別れることもやぶさかではない。私の目的はゼゲネア帝国を倒すことだ」

「そうであろうな。だがそなたたちもこたわるな。殿下のために命を落とすことになるのはわし一人で十分、そなたたちはゼノビア王国の復興を目指せ」

「わたしもお供いたします」

ランスロットが速攻で答えたが、アッシュは頑固に首を振つた。

「二四年前、陛下のために死に損なつたわしだ。万が一の時は今度こそ騎士道を貫かせてくれ。わしの言うことがわからぬか、ランスロット？ それならばそなたは騎士ではない。そなたは騎士道というものがわかつていないのだ」

陽が沈み、大聖堂はほとんどが闇に包まれた。日没時、聖課を告げる鐘が鳴り響いたが、ほとんどが女性の占める大聖堂では騒ぎもなく、司祭たちはまるで影のように忍びやかに動き、不思議なことに灯りもほとんど必要としないようだった。その動きもいつか収まり、さらに深い沈黙に包まれる。

その時を待つてグランディーナは鐘楼に向かった。鐘楼は敷地内でもいちばん高い建物で、アヴァロン島でも山を除けば最高峰に位置する。壁に取りつけられた板状の階段と鐘、四方に開けられた窓しかない単純な形だ。

アイーシャはその最上段にいた。面纱を上げて窓縁に燭台が置いてある。

「ごめんなさい、こんな時間に呼び出したりして。でも日中はお勤めが多くて抜けられなかつたし、あなたたちは明日には発つて聞いたから」

「私は大丈夫だ。あなたの方が危ない」

「大丈夫。鐘楼の鐘突を代わつてもらつたの。蠟燭があれば下りられるわ」

光のなかでアイーシャは微笑んだ。フォーリスに似ているが、まだまだ幼さの残る顔立ちだ。何より疲労の色が濃いし、目の下にくままでできかけている。

「アヴァロン島にはいつ来た？」

「一昨日よ。みんなびっくりしてたけれど、お母さまの葬儀には間に合つたわ。でもまだ夢を見ているよ。うな気がする。手紙を貰つた時はまさかつて思つたのに本当だつたなんて」

「手紙？」

「私、ディアスポラのアングレームという町にいたの。お母さまのお友達のボーグナインさまにお会いしていたのよ。誰がくれたのかわからないの。わざと汚い字でロシユフォル教会大神官フォーリスの命が危ないって、それだけ書いてあつたわ」

「だから戻つてきたのか」

「そうよ。まさかつて思つたけど、もしかしたらつて心配になつて。だけど、大聖堂はいま、それどころじゃないんですつて。ガレス皇子がお母さまのようになりたくなかつたら帝国への忠誠を誓えつて。次の大神官も決まつていないのに、どうなるのかしら？」

「返事をしなければならなくなる前にガレスを倒す。私にできることはそれぐらいだから」

アイーシャは話を止めてグランディーナの顔を凝視した。眼が赤い。

「あなたが解放軍のリーダーだというのは本当？」

「嘘をついてもしょうがない。フォーリスさまの死を責められても応えられないけれど」

「そうじゃないわ。ねえ、私も一緒に連れていつてくれない？ 足手まといにはならないわ。司祭なんだから、きつと役に立てると思うわ、どう？」

「そのために、私を鐘楼まで呼び出したのか？」

「そうよ。いけなかつたかしら？」

「いけなくはない。戦う意志と力のある者はいつでも誰でも歓迎する。でもその前にずっと借りっぱなしだった。返す」

「ええ？」

赤銅色の髪が羽根のように広がってまた落ち着いた。髪を縛っていた手巾（はんかち）をほどき、四つに畳んでアイーシャの手に乗せる。

白い手巾はすっかり古びていた。何回も洗ったのだろう。生地も傷んでいて、もう手巾としては使えそうにない。だがいつ「貸した」のかアイーシャは忘れていなかった。否、手巾を広げた時、その思い出が鮮明に蘇ったのだ。あれもこの鐘楼での出来事だった。グランディーナ、サーラはあの日を境にアヴァロン島を離れた。五年も前の話だ。

「ずっと、持っていてくれたの？」

「借りた物は返せと言われていたし、それに大事な物だったのだろう？　だが返してももう使えないな」

アイーシャは微笑もうとしたが唇はいびつに歪んだ。

「そうね。だけど大事な物だったのは本当。お母さまから戴いたの。お裁縫なんて得意じゃないのに誕生日に何もあげられなかつたからって、私の頭文字を縫

い取つてくれたんだわ」

その時の光景がいまでも見えるようだ。

母と娘というよりも大神官と僧侶という形での接し方が圧倒的に多かつたフォーリスは、娘だからとアイーシャを特別扱ったこともなかつた。

「私の誕生日だつて忘れがちで、でも、あの時はいつも忘れてるからつて、みんなには内緒で手巾をくれたの。指を傷だらけにして」

大粒の涙がこぼれた。息を詰まらせながら、それでもアイーシャは話し続けた。

「母さま、お裁縫が得意じゃないのに、こんなことしかしてあげられなくてご免なさいねつて。いいのに、母さまが私の誕生日を覚えていてくれただけで私は嬉しかったのに。いつも忙しいのに、いつも忙しかったのに、いつもいつも！　母さま！　母さま!!!」

グランディーナに抱きしめられて、アイーシャはとうとう我慢できずに泣き出した。涙は後から後から止まらなかつた。

「ありがとう。少しだけ気持ちが悪く落ち着いた。こんなに思い切り泣いたの、久しぶりなの」

「アイーシャは人前で泣かなくなつた」

彼女は離れて頷いた。

少しだけ涙がこぼれてグランディーナが案じ顔に手を伸ばす。

「だって私、大神官の娘なんだから。アヴァロン島から来たのだし、大陸へ修行にも行ったのだし、誰にでもできることをしたのじゃないのよ。だからそういう人は軽々しく泣いちゃいけないんだわ、ずっとそう思っていたんだもの」

けれど話しながら涙がこぼれて、アイーシャは自分から手を求め、頬に押しつけた。グランディーナの手は冷たかった。

「手紙をもらってすぐにディアスポラを離れたの。お母さまが危ないって言われたけれど、間に合いますようにって、せめてお母さまに一目会えますようにって、ずっとずっと祈ってきたのに」

アイーシャはここで一度すすり上げた。

「でも私は間に合わなかったわ。それどころかお母さまの葬儀にやつと間に合ったぐらい。お母さまはガレス皇子から首だけ送り返されたって聞かされて。私、あの時に泣けば良かった。大きな声で泣きわめいてしまえば良かった。お母さまお母さまって小さい子のように泣いてしまえば良かった」

「でも泣けなかった？」

「みんなが私を慰めてくれて、お気の毒に言ってくれて。でもロシユフォル教会も大変なことになっているんですって言われて。私がどうしろって言われたわけではないの。でも私一人だけ部屋に閉じこもつてもできないくて、毎日、何か手伝いをしていたわ。忙しい方が気も紛れるだろうと思つて。でも一人になるとお母さまのことを思い出して、最初の晩に泣いてしまつて、どうしても眠れなかったから、無理を言つて大部屋に変えてもらったの。でも眠れなくて、こつそりと泣いてしまつて。どんなに疲れていても眠れない。どうすればいいのかわからない。私、修行を途中で放り出してきたのよ。だからあなたたちが来なくてもまたアヴァロン島を離れようと思つていたの。だけどあなたたちが来たわ。一緒に行かせて」

「アイーシャ、私の手を見て」

グランディーナは右手のひらを上にして差し出した。籠手は外しているのだから素手だ。いくつもの傷痕と両手首に目立つのは盛り上がった輪のような癩痕だ。日焼けもし、荒れてもいる。傷一つないアイーシャの手とはまるで違つていた。

「あなたの手がどうかしたの？」

「何人も殺した手だ」

ここで間を置いたのはアイーシャが息を呑むことを予測してだろう。

「アヴァロン島に来る前も、アヴァロン島を出てからも、武器を取り、自分が傷つけられることよりも、他人を傷つけることを選んだ手だ。あなたが来たがっているのはそういうところだ。この先、戦いはもっと激しくなる。あなたが治さなければならなくなるのは私の傷つける敵兵かもしれない。あなた自身かもしれない。それでも一緒に来たいと思う？ ロシュフォル教会の大神官は武器を取らぬ代わりに心で戦い続けると聞いた。正義のために内なる戦いを続けると聞いた。だからアヴァロン島はロシュフォルやラビアンのごつと前の時代からいかなる権力にも与したことはないし、大神官以外の階級も作らなかつたそうだ。あなたはここに残り、フォーリスさまの遺志を継ぐこともできる。人殺しにわざわざつき合うことはない」

アイーシャは笑おうとしたがすぐに唇の端が歪んだ。グランディーナも笑ってなどいなかった。差し出された彼女の手を取り、背を屈めると軽く唇が触れる。視線を合わせぬ姿勢のまま、どちらかというと自分に言い聞かせるような口調でアイーシャはつぶやいた。

「神様のことを信じる事ができないのに大神官になれるのかしら？ お母さまは殺される瞬間まで神様のことを信じていたのかしら？ それならばお母さまはなぜ殺されたのかしら？ 大神官は誰のために戦うの？ 私たちは誰のために祈るの？ 誰に祈るの？ 私たちはなぜ神様を信じているの？ 私たちが皆、聖なる父の子ならば、なぜお父さまはお母さまを助けてくれなかつたの？」

「私には神のことはわからない。私は誰にも祈ったことはない。神の存在以上のことは信じない。たとえあなたが神を信じなくても神は困りはしないし、あなたの問いにも答えはしない」

「意地悪ね、グランディーナ。私はこれでも司祭なのよ。神様を信じない司祭なんていやしないわ。でも私、わかるの。自分が神様を信じてないって。母さまが殺されたのに神様に祈ることなんて馬鹿馬鹿しいって。私、司祭失格だわ。一緒に行かせてもらっても何の役にも立たないかもしれないわね」

「神は神の理屈と摂理で動いている。人が信じようと信じまいと神は神だ。それ以上でも以下でもない。あなたたち僧侶の力は神の恩恵ではない。あなたたち自身の力だ」

アイーシャは顔を上げ、グランディーナの灰色の双眸をのぞき込んだ。

「さつき、お母さまの墓の前で会った時、あなたが泣いているような気がしたのは私の気のせい？」

「気のせいだ。あそこでは泣いていない」

アイーシャの頬を涙がつつたが、彼女は微笑んだ。

「じゃあ、ほかのところでは泣いたのね？ それならば、私、あなたと一緒に行く。あなたの助けになりたいの。お母さまだって絶対に許してくれる。いいでしょう？」

そう言いながらアイーシャはグランディーナの首根っこにしがみついた。彼女が幼子のように震えて、少し間をおいてからそつと囁いた。

「あなたは私の身体が汚れていても同じように言ってくれる？」

その声まで震えているようで、アイーシャはしがみつく腕に力を入れる。

「馬鹿言わないで。グランディーナはグランディーナよ。あなたがどんな人でも一緒に行くわ」

「汚れる」という言葉の意味をその時のアイーシャはあまり深く考えなかった。傷つけ、傷つけられ、自らを「人殺し」だと言うグランディーナ自身のこと

しか思えなかった。自分の世間知らずさを彼女は後々まで思い出して赤面したものだ。

「これはあなたにあげる。ずつと大切に使っていてくれたんだもの、使い道は違ったけれど、お母さまも喜んでくれると思うわ」

グランディーナは一瞬、戸惑ったような表情をしたが、すぐに頷いた。

五年前、フォーリスただ一人に向けられていた笑顔は、あるかないか、わからないようなものであった。

「ありがとう、アイーシャ」

長い髪が無造作に束ねられる。赤銅色の輝きだけがあの時と変わらない。

「見て。もうじき日の出よ」

「すつかり遅くなつたな」

「一晩くらい大丈夫。体力ついたんだから、せつかくだから日の出を見ていきましようよ。しばらくここからの光景も見られないんだもの」

「アヴァロン島に戻ってきたばかりなのに、また出ていくなんて後悔しない？」

「試すようなことを言わないで。行くと言ったら行くわ。私、案外、頑固なんだから。来るなって言っただつてもう無駄よ」

「まるでフォーリスさまと話してるみたいだ」

アイーシャは笑い声をあげてグランディーナを振り返る。彼女も少しだけ微笑んでいた。それが嬉しくてその手を握り締めた。

やがて鐘楼の音が大聖堂全体に鳴り響いた。少し早いが夜明けの聖課を告げる鐘であった。

「一晩中帰ってこないとは思わなかったぞ」

「話が長引いた」

「それにしたつて限度つてものがあらあな。それになに、彼女、来るの？」

「そうだ」

「俺はカノープスⅡウオルフだ。よろしく頼むぜ」

「は、はい」

翼も入れるとカノープスの身長は七バス(約二メートル一〇センチ)にもなる。五バス(約一五〇センチ)そこそこのアイーシャにはまるで見上げるような高さだったので彼女はついグランディーナの後ろに回った。

「おいおい逃げるなよ。俺が恐い人に見えるつていうのか？」

「そ、そういうわけじゃないんですけど、私、男の人とはあまり話したことがなくて。有翼人の方もよく

知らないんです」

「ほんとかよ」

「ロシユフォル教会にいるのはほとんど女性だけだ。逆に有翼人は滅多に教会に行かない。無理を言うな、カノープス。それよりもまさか私を待つて起きていたのではないだろうな？」

「おあいにく、俺はそんなお人好しじゃねえよ。ランスロットはけつこう遅くまで頑張つてたが適当に寝たはずだし、ほかの奴らはさつきと寝たさ。おまえも人のこと氣遣うぐらいなら、もつと自分を大事にしてるつていうの」

「私は大丈夫だ」

「またそういうこと言う」

「あの、カノープスさん！」

「ああん？」

「私が見えますから。グランディーナに無茶させないように私が見てるようにしますから。だから心配なさらなくてください」

「アイーシャ、そんな無茶を」

「だって、私が無茶すればあなたが見ていてくれるもの。そうすれば、あなたもそんなに無茶しないですむでしょう？」

「何かあるのかわからないのに、そんな簡単に請け負うものじゃない」

「だって、私がそう言えば、あなたは私のことを気にしてくれるでしょう？ そうしたら、きつと無茶しないんじゃないかしら」

「いいじゃねえの、無茶けつこう。そういうわけなら大いに無茶するといいや。そうだろう？ いい子だな、アイーシャ」

そう言ったカノープスが愛嬌のある笑みを見せたのでアイーシャもつられた。さつき怖じ気づいたことが申し訳なくなるような顔だ。

彼が頭に手を置き、二度、軽くたたいたたいたので彼女は思わずこみ上げた涙をこらえた。

「そうそう、子どもは素直がいちばんだぜ。おまえ、ミネアと同じくらいだろ？」

「あのー、ミネアさんでどなたでしょう？」

「ここにはいない。あなたと同年の僧侶だ」

「じゃあ、仲良くなれますね、きつと」

「無理しなくていい。彼女も人見知りする方だ」

グランディーナは微かな笑みを浮かべたが、そこに背後からカノープスが覆い被さった。有翼人の羽根は人一人を悠に隠せる。アイーシャは息を呑んだが、肩

に手を置かれて振り返ると有翼人の女性が温かく微笑んでいた。

「放せ、カノープス」

「へーんだ、簡単に後ろを捕らせるとはずいぶん油断してるじゃないか。だけどそれぐらいの方がかわいげがあるぜ。ランスロットが見たら、感涙物だろうになあ」

「どうしてそこでわたしが出てくるんだ？ わたしのことより、君自身もずいぶん早起きなんだな」

「山の空気がうまいから目が覚めたんだよ。それに俺はもともと早起きなんだ」

「カノープス、放せと言ってるだろう」

「兄さん、おふざけはそれぐらいにしてちょうだい。アイーシャがびつくりしているわ」

翼を開くとカノープスがグランディーナの首に両腕を巻きつけているのがわかった。彼が手を放し、今度は頭をたたこうとするとそれはさすがに空振りした。

「とととつ」

ランスロットとユーリアが笑ったが、グランディーナは無視を決め込んだ。

話をしているうちにウオーレンたちも起きてきて、アイーシャは一人ひとりに挨拶をした。

「アイーシャ・ルクヌーデルといいます。司祭とはいえまだ修行中の身です。よろしく願います」

そのなかで同じ司祭のマチルダとは仲良くなれそうにアイーシャには思えた。物腰は穏やかで清楚、凛とした人となりはユーリアとは違う大人の女性だ。

「よろしく、アイーシャ。解放軍にはほかにミネアやエオリアという僧侶の方もいます。シルキイ、マシエラ、フィーナは女戦士、ちよつと言動に乱暴なところがあるかもしれないけれど、根はいい人たちだから仲良くなれると思うわ。ポリーシャさんとヴァネッサは槍騎士、デネブさんは魔女。それにユーリアさんとグランディーナと私、女性はこれで全員ね」

「はい、よろしく願います」

「あなたは大神官殿の娘さんですが、後任を任せられることはないのですか？」

そう訊いたのは占星術師と言ったウォーレンだ。

「私はまだ修行中の身です。そのような未熟者に大神官を任ずることはありませんし、世襲制でもありませんのでご安心ください」

「そうですか。ならば良いのですが」

元ゼノビア王国の騎士団長だというアツシユはアイーシャの挨拶に頷いたきりで、眉間に皺を寄せて自

分の考えに没頭してるように見えた。

ランスロットとギルバルドはふつうに対応したが、二人の会話からアイーシャはグランディーナたちがここまで魔獣に乗ってきて、アムドにいるガレス皇子のところまでも魔獣に乗っていかうとしていることを察した。

果たして生まれて初めて間近で見た魔獣は、アイーシャが想像していたよりもずっと大きくて恐ろしいだった。ワイバーンはまだいいが、鷲の頭を持つグリフォンはとても恐そうだ。

「アイーシャをどこに乗せるんだ？」

「ブルートーンならば一人増えても大丈夫だろう。

ギルバルド、マチルダ、あなたたちがクロヌスに乗ってくれ。三人でブルートーンに乗る」

「以前のような距離ならばともかく、アムドまで三人では厳しくありませんか？」

「グランディーナとアイーシャが騎乗鞍に座ればいいわ。私ならば万が一、落ちてても翼があるもの」

「ポリュボスカシューメーに二人乗せるわけにはまありませんか？」

「グリフォンは二人乗せると速度が落ちる。今日中にアムドに着くにはこれがいちばんいい」

自分のあずかり知らぬところで話がぼんぼん進んでいく。アイーシャはおそろおそろ騎乗鞍を見たが、そんなものに乗ってアムドまで飛んでいくなんて非現実的な話に思えて目眩までしそうだ。大聖堂からアムドまで、歩けば二日もかかる距離だ。そこを半分の時間で飛んでいこうというのだから。

そんな彼女の両肩にユーリアが手を置いた。

「大丈夫よ、アイーシャ。プルートンは男の子だから女の子には優しいの。でも怖じ気づいたところを見せちゃ駄目よ。魔獣は敏感に人の心を察するから、恐がっていると思わせたら乗せてもらえないわ」

「は、はい」

グランディーナが先に乗っていて、アイーシャに手を差し出すと軽々と引つ張り上げた。

「私はあなたの前に乗せてもらおうようね」

「あなたがそこに座ると前がほとんど見えないんだがな」

「後ろに乗ると危ないでしょ」

五頭のワイバーンとグリフォンは今度はプルートンを先頭に飛び立つた。

上空でグランディーナが大聖堂の上を一周させる。いちばん高い鐘楼が眼下に見えて、アイーシャは息を

呑んだ。ほとんどロシュフォル教会の中しか知らなかった自分がこうして解放軍に加わり、ガレス皇子討伐、その先の打倒ゼテギネア帝国に向けて旅立とうとしている。そのことが生まれて初めて見下ろした大聖堂を見た時に急に実感されてきたのだ。

「行こう、アイーシャ」

グランディーナが振り返って言い、彼女は黙って頷いた。神に祈る言葉は忘れてしまった。だからアイーシャは亡きフォーリスに祈る。

（お母さま、どうか、私たちの旅を見守っていてください。私にどうか勇気を与えて）

眼下の山並みは地平まで続いていた。

「おまえ、まさかあいつを待つて起きてたのか？」

「それもあるが、半分は違う。アツシュ殿に言われたことを考えていたら眠れなくなった」

「じいじに何、言われたんだ？」

ランスロットが食堂でのグランディーナとアツシュのやりとりを話すと、意外なことにカノープスはうなり声さえあげた。

「アツシュ殿に言わせるとわたしは騎士ではないのだそうだ。その理由と、アツシュ殿の言われる騎士道

が何なのか、考えていたらいつまでも寝つかれなかった。だがアッシュにすぐに伺いするのも芸がない。ギルバルドに訊いてみようと思っていたのだが」

「俺とエレボスに乗っちゃったのか」

「わたしが自主的に乗ったような言い方をしないでくれないか」

「悪い悪い、おまえがそんなこと考えてるなんて思わなくてよ」

「おや、下がるぞ。何かあったのか？」

「アイーシャの具合が良くないようだ。気丈に見えたってまだ子どもだ。連れてくるなんて無理だったんじゃないか」

手綱を操りながらグランディーナが振り返った。皆をひとわたり見回して、また前方を向く。

「何だ、あいつ？」

「さあ。わたしを見たようだが、用があったのはわたしではなさそうだな」

やがて五頭は山間の平地に下りた。

真つ先にブルートーンを下りたグランディーナが、エレボスの方に走ってくる。後からユーリアに手助けされてアイーシャが下りた。

「ランスロット！ そのマントを貸せ」

「いいけれど、何にするんだ？」

「アイーシャは魔獣に乗るのが初めてだ。鞍ずれをおこした」

「それは気の毒なことをしたな」

駆けつけようとしたが若い娘だ。ランスロットは思いどまり、マントだけグランディーナに差し出した。

「何かあったんですか？」

「鞍ずれだと」

「おや、それは」

ウォーレンが意外そうな顔をする。

話を聞いてマチルダがすっ飛んでいき、改めて彼女の存在の大きさを見せつけた。まったく解放軍は、彼女らの力がなければにつきもさつきもいなくなるだろう。

「ごめんなさい、こんなところで」

「大丈夫よ、アイーシャ。マチルダさんが来てくれたわ。それにマントを敷けばだいぶ楽になるし、乗るうちにあなたも慣れてくるわ」

布を引き裂く音にアイーシャは一瞬、痛みを忘れて見入った。赤いマントは確かランスロットのものだ。だがそれ以上に驚いたのはグランディーナの厳しい横顔だった。

「気がつかなくてすまない」

「大丈夫よ、グランデイーナ。あなたの方がしょげちゃ駄目。これからガレス皇子を討とうって人が暗い顔してないで」

「そうですね。それほど重傷じゃありませんから。休みながら飛べばもつと楽でしょうけれど」

「しようがないな」

アイーシャが何か言おうとするのをユーリアが遮る。自分の言葉にあつきり同意したリーダーにマチルダは心底驚いた顔だ。そんな彼女にユーリアが肩をすくめてみせた。

グランデイーナはそれには気づかず、男性陣の方に向かった。

「休憩しながらアムドへ向かう」

「おいおい、そんなお嬢ちゃん連れていつて大丈夫なのか？ 戦いはこの先もつときつくなると言ったのはおまえだぞ。あいつを庇いながら進めばおまえ自身の戦力が半減する。それでもいいのか？」

カノープスの意見にウォーレンやアッシュが同調するように頷いたが、ギルバルドは逆に反対のようだ。

「覚悟はしている。そのことではあなた方に迷惑はかけないつもりだ」

「それが迷惑だと言ってんだよ。だいたい戦士たちを除隊させたのはつい昨日のことじゃねえか。司祭だからって後方支援ばかりとは限らねえ。後方支援が安全とは限らねえ。おまえ、またあんな思いをしたのか？」

「待つてくれ、カノープス、ウォーレン、アッシュ殿。彼女にはいつも世話をかけている。わたしが手伝おう。君と一緒に行って、役立てるのはこんなことぐらいだからな」

「ありがとう、ランスロット」

ランスロットの申し出より、それに礼を言うグランデイーナより、彼女が初めて見せたはかなげな笑顔にその場にいた全員がそれ以上、反論する気をそがれた。ウォーレンとアッシュは言葉を失い、カノープスは空いた口が塞がらなかつた。ギルバルドも驚いたように息を呑んだ。

当然、彼女はそのあいだにアイーシャたちのもとに戻っている。

「さあ、行くとしよう」

一人、ランスロットがカノープスの肩をたたいた。

「あ、ああ。昼間から夢でも見てるみたいだぜ」

「冗談を言うなよ」

さわやかな笑顔を見せるランスロットにカノーパスはわけのわからぬ敗北感を感じて睨みつけた。

「おまえ、知ってたんだらう？」

「何の話だ？」

「あいつの顔に決まってるだろう」

「知るわけないだろう。わたしだつて驚いたさ」

「じゃあ、その面はなんだ？」

「あんな顔をされれば誰だつて嬉しくなる。君だつて、そうじゃないのか？」

「だからつて、おまえにそんな顔されるのは腹立つんだよ！」

「そんな顔つてどんな顔だ？」

「この野郎〜！」

「痛いぞ、カノーパス！」

ランスロットよりカノーパスの方が頭半分くらい身長が高い。翼も入れるとその差は頭一つ分以上になる。力の差もあるので首根っこを押さえられると身動きがままならない。

もつとも傍から見るとじやれているとしか思えない二人にアッシュが声をかけた。

「昨日の言葉は取り消そう、ランスロット。そなたになら、わしの後も託せそうだ」

「アッシュ殿、それはどういう意味ですか？」

だがゼノビア王国元騎士団長は剣を見せて微笑みただけであった。その笑顔が二年前、自分を従騎士に任じた時と同じものだと思いき、ランスロットは嫌な予感がした。剣も、騎士団に在籍していたのが長い彼には銘がわからない。

けれどアッシュはまだトリスタン皇子に再会していない。グラン王もジャン皇子も亡きいま、ゼノビア王国の血筋はただトリスタン皇子が受け継ぐのみだ。その皇子に再会する前にアッシュが死に場所を求めようとは彼にはどうしても思えなかった。

「あれはロンバルディアだろう。先日のゼノビア城戦後にゼノビア城に放置されていたものをアッシュ殿が見つけたと聞いている」

念願かなつて三度目によくギルバルドと一緒にエレボスに乗ったランスロットは、彼からそんな話を聞かされ、驚きを新たにした。

「ロンバルディアと言えば、ゼノビア王国騎士団長の証と聞いた。それをわたしに見せたということ、まさか騎士団長位をお譲りになるつもりなのだろうか？」

「アッシュ殿もわたしも過去の人間だ。若い者に譲りたいという気持ちがおありでも不思議ではあるまい。あなたならば長年、ウォーレン殿とともに人びとをまとめてきたという功績もある。騎士団長としても適任だと思う」

自分はまだ若輩者だ、とランスロットには言えなかった。解放軍を見渡しても彼より年長の者は少ない。騎士に限って言えば、リスゴーが年上、バーンズ・タウンゼントは同じ年だが、そのリスゴーはイービルデッドのために重傷を負い、除隊を余儀なくされた。一つ下のガーディナーはいまは騎士だが、この戦いが終わったら商人になりたいと公言している。アレック、ステイング・モートンはまだ若い。彼らに騎士団長の重荷を押しつけるのは気が進まない。気の早い話ではあるが、年齢的に自分以上の適任はいなさそうだ。

「わたしにそのような大役が務まるだろうか？」

返ってきた答えはギルバルドの豪快な笑い声だった。振り返ったカノープスがやってきたという笑い顔をやる。

「務まると思って団長位を受ける者は少ないだろう。わたしが魔獣軍団長を嬉々として受けたと思うか？ アッシュ殿に迷いがなかったとでも？ わたしを団長

にしたのはほかならぬ魔獣軍団の者だ」

いまでも元魔獣軍団長として影響力のあるギルバルドだが、二四年前、軍団長位を受けた時には二六歳の若さであった。しかし、ランスロットが覚えているのは堂々とした魔獣軍団長ギルバルド・オブライエンである。その彼を支えたのはいまは亡き副団長ガルシア・ラウムと無二の親友カノープス・ウォルフ、そして恋人のユーリア・ウォルフであった。

「先のことをよくよく考えても仕方ない。いまはガレス皇子を倒すことに専念しなければ」

「それがいい。わたしもあの方の姿は一度だけ拝見したことがあるが、まるで自分のうちを見透かされるように思えた。遠目でなければ、ああして正視はできなかつただろう」

「それは賢者ラシュデイの間違いではないのか？」

確かにガレス皇子も暗黒魔法の使い手だと聞いたことはあるが」

「いいや。ラシュデイ直伝と言われるだけのことはある。ガレス皇子のお力は底知れない。それにわたしは賢者ラシュデイにお目にかかったことはない」

数度の休憩を挟みながら一行はアムドを目指したが、

途中でグランディーナは行く先をトマヤングに変更し、今度は誰も反対しなかった。

しかし今回は野営道具をまったく持参しておらず、彼女らはトマヤングに宿を求め、翌日、アムドを目指して発った。白竜の月二〇日のことである。

「どうした？ 何でこんなところで止まるんだ？」

「ガレスが近い。空でイービルデッドを喰らったらひとたまりもない。下りて行こう」

カノープスが振り返るとアッシュが頷いた。

「ユーリア、あなたが残って魔獣たちをみていてくれ。ガレスを片づけたら戻ってくる」

「わかったわ。気をつけてね」

「マチルダとアイーシャは離れている。

カノープス、偵察を頼む。

行くぞ」

「了解。見つけたら戻ってくる」

トマヤングからアムドまでは街道が続いている。歩けば二時間足らずの距離だ。

グランディーナがワイバーンを下りたのはその中間ぐらいの距離で、三〇分も歩くとカノープスが急いで戻ってきた。

「ガレス皇子はアムドの手前にいたぞ。おまえの言ったとおり、部下は一人もいない。どうする？」

「分散して近づこう。一度に何人もイービルデッドを喰らうのがいちばん怖い。それとあなた方に言っておく。誰がイービルデッドの餌食になってもガレスを倒すことに専念しろ。奴を倒さねばイービルデッドは切れない。助けようとすれば、その者も奴の犠牲になる。いいな？」

「承知した」

「マチルダ、アイーシャ、もつと離れている。念のため、私には近づくな。あなたたちもガレスが倒されるまで治療はできないと思え。あなたたちではイービルデッドに耐えきれない」

「わかりました」

グランディーナが当然のように真ん中に立つ。その両脇をアッシュとランスロット、いちばん外側をギルバルドとカノープスが占めた。ウオーレンはグランディーナの後ろに立ち、マチルダとアイーシャはさらに離れる。

グランディーナが音もなく曲刀を抜き放った。それを見てアッシュがロンバルディアを抜く。ランスロットは剣の柄に手をかけた。

やがて見えてきたガレス皇子は一人で立っていた。手の届くところに両手持ちの斧が立てられているだけで部下もいない。噂に伝え聞くとおり漆黒の鎧兜に身を包み、籠手、靴も黒で素肌はいつさいさらしているかった。

一目見た時、彼女らは一樣に背筋に悪寒が走った。人の姿をしているが人ではない。何の根拠もないが、それは確信に近い勘だ。数多あまたの戦をくぐり抜けてきた彼らだからこそ、気づいた真実だ。

「よく来たな、反乱軍の諸君」
とおりのいい声が聞こえた。それがガレス皇子のものだと知り、思わず歩みが止まる。

「旧ゼノビア王国の残党どもか。似非占星術師、ひよつこ騎士、魔獣軍団長に鳥野郎、お高き騎士団長に傭兵風情。くくくくつ、はあつはつはつはつはつ！」

「何がおいしい！」
「何が、だと？　これが笑わずにいられるか！　悲壮な顔してグランとフォーリスの仇でも取りに来たのか？　二四年前、てめえに化けた時はまだ精悍としていたよ。それが牢獄暮らして衰え、いまでは死に場所を探して彷徨っているそうじゃねえか！」

「では陛下を殺した真犯人はあなたか！」

「そうだ。知らなかったのか、老いばれ?!　知らずに二四年前も繋がっていたのか？　おめでたいなあ。あの時のグランの顔をてめえにも見せてやりたかったぜ。騎士団長に裏切られると知った時のあの狼狽えぶりをな！」

「これ以上、陛下を愚弄することは許さん！」

「ガレス、貴様!!」

アッシュが飛び出したがグランディーナの方が速かった。もつとも彼にはそれが幸いした。

グランディーナが曲刀を振りかぶったその刹那、斧が一閃され、彼女の周囲に魔法陣が浮かび上がった。

「愚か者め！　かかったな!!」

飛び出そうとしたアイーシャをマチルダが必死の形相で引き留める。

「グランディーナ?!」

「出てはいけません、アイーシャ！」

逃げる間もなく真つ黒な光に彼女は包まれ、姿勢を崩した。骨の折れる鈍い音がする。だがその無理な体勢のまま、イービルデッドにさらされたままでグランディーナは曲刀を振り上げ、目にも留まらぬ動きで振り下ろした。

疾風がガレス皇子を撃ち、よろめく。魔法陣の光が

弱まったがまだ消えていない。

「雷よ！」

ウォーレンが高らかに呪文を唱え、魔法の雷がガレスに落とされた。

「ガレス皇子、覚悟！」

カノープスがガレスに殴りかかる。鎧が兜にめり込み、意外なほど脆くひしゃげた。

身を翻そうとしたガレスをギルバルドの鞭が捕らえて引き留めた。

「グラン王の仇！」

左右からアッシュとランスロットが斬りかかる。

ガレスは防戦し、魔法陣の光が完全に失せた。

「グランデイナー!!」

アイーシャは駆け寄り、即座に魔法の詠唱を始めた。遅れてマチルダが唱和する。

「ラシュデイとともに陛下を欺き殺めし罪、大神官フォーリス殿を殺めし罪、その他諸々の罪業、己が命で贖っていただこう！」

ランスロットが捕らえ、アッシュがとどめを刺した。

ガレスが倒れると同時に兜もげたが、彼らの想像していたような人物は現れなかった。否、ガレスの全身を包んでいた鎧兜の中身は空っぽだったのだ。

「どういうことだ、これは？」

その場にいる誰もが信じられない思いで空洞の鎧を見つめた。

その時、空の兜から紛れもないガレスの声が響いた。

「今日のところは俺の負けだ。だが安堵するには速いぞ！ 俺は不死身だ。また貴様たちの前に現れる。」

もちろん今日のお返しはたっぷりとさせていただこう。それまでせいぜい、つかの間の勝利に酔っているが、い、貴様らの力はよくわかった。次も勝てるなどと思ふなよ！ はははははは!!」

ガレスの声とともに兜が揺れた。が、その哄笑が収まると兜も鎧も完全に沈黙した。

アイーシャとマチルダの唱和する声だけが聞こえるなか、グランデイナーがうめき声をあげ、身じろいだ。彼女はガレスの必殺技イービルデッドをまともに食らい、身体中の穴という穴から出血していたのである。

「俺はユーリアを呼んでくる！」

カノープスは飛び立った。

二人の司祭の額に玉のような汗が噴き出し始めた。

ガレスの姿を見た瞬間、抑えようのない憤怒がグランデイナーを突き動かした。

フォーリスにされた仕打ちへの怒り、ガレスに対する私怨、彼女はわかりきった罠に飛び込んだのだ。

イービルデッドが発動した時、骨が砕け、激痛のために倒れた。一発喰らわすのがせいぜいだ。逃げるなどできなかつた。

イービルデッドは罠にかかった者を足止めにしてから捌り殺す。魔法陣から噴き出す闇の力は術を受けた者の身体を内側から破壊する。その破壊力は被害者の命を奪うに足りるほどだ。

だがその痛みは何と甘美なことだろう。立ち上がれぬほどに傷つけられた身体が、いまにも消え入りそうな意識が、闇の力に委ねられることを望んでいる。もつと闇の力に晒されることを求めている。このまま身体も意識も委ねてしまえば、楽になれると誰かが囁いている。

賢者ポルトラノの言ったとおりだ。ガレスとの接触は危険すぎた。だが身体が動いた。止めることもできず、止める気もなかつた。

「欲しいのだろう？」

ガレスがそう言ったような気がする。

いいや、そんなはずはない。ガレスは彼女に気づいていない。そんなことを言うはずがない。

このまま闇に身を委ねてしまいたい。誘惑されそうになる心に鞭打つような思いで彼女は闇の中の一筋の光を見ようとしたり。

何のために生きてきたのか。

戦ってきたのは何のためか。

突き刺すように白い光を彼女は見た。

自分はまだ何の目的も達成していない。

こんなところでガレスに破れるためにゼテギネアに帰ってきたのではない。

激しい痛みが全身を貫く。それは闇の痛みと違って甘美ではない。ただ痛い。意識を保とうと努力していなければ目を覚ましていることもできないほどに。

だが彼女はそうした。何かにすがろうとして手を伸ばす。差しのべた手が空をつかんだ。その手を取る者があつてグランディーナは意識をはつきり取り戻した。アイーシャだつた。涙が頬をつたい、頬に当てられた指から滴る。

「ごめん」

「いいの、あなたが無事だったから」

「あんな状態からご自分でお戻りになるなんて。なんてお強いんでしょう」

マチルダが感嘆のため息をもらした。

「こんなところでおしまいになっていたら何もかも無駄になる」

「でも、自分、安静ですよ。しばらくアヴァロン島は離れられないでしょうね」

「馬鹿な。ここで立ち止まっていられるか！ これからディアスポラに行かなければ」

だが言葉に反してグランディーナは激痛のために言葉を途中で切らし、マチルダに念を押された。

「動けないでしょう。本当は動かしたくありませんがアムドに宿を求めなければなりませんね」

「馬鹿を言え！」

ところが彼女は強引に跳ね起きた。アイーシャの手が弾き飛ばされたが、そのことにも気づいていない。鼻から緩慢に血が垂れる。痛みにすぐ呼吸が荒くなつたが、グランディーナはそれさえも押し切った。

「動けないならワイバーンでもグリフォンでも使えばいい。

カノープス、ユーリアを呼んでこい。

アヴァロン島でぐずぐずしていてみる、帝国に反撃されて終わりだ。帝国軍に比べれば私たちの戦力など蟻のようなものだ。移動しているから奴らに捕らえられないでいるのがわからないのか。怪我なんて移動し

ながらも治せる」

「ユーリアも魔獣たちも来てるぞ」

「正気ですか、グランディーナ?!

カノープス、あなたもそんなことを言わないでください」

「冗談でこんなことが言えるか」

「動かせばあなたの命が危ないんですよ!」

「私の命だ、放っておけと言っているだろう。触るな、マチルダ!」

「何を言ってるんですか?! いまだってそうして出血してるといふのに」

「だから何だ。自分の身体のこととは私がいちばんよく知っている。こんな傷で倒れるような柔な身体だと思うか。

ランスロット、手を貸せ!」

「グランディーナ! ランスロットさま!」

マチルダも頑固だがグランディーナはそれ以上だ。さつきまで死にそうな顔だったのに勢いよくマチルダの手をはねのけたところなど瀕死の怪我人にはとうてい見えない。だがその顔色は白さを通り越して青い。そうして意識を繋いでいなければ、すぐに気絶してしまうのかもしれない。

「あ、あの！ 私が診ていますから、ずっとついて
いるようにしますから、無理をさせませんから！ も
うやめてください！」

「アイーシャ、自分の言っていることがわかってい
るの？ 絶対安静の怪我人を動かしたらどうなるか、
安易にそのようなことを言うものではないわ」

「でも、私たちが反対してもグランディーナは言う
ことを聞かないでしょうから、だつたら一緒にいた方
がよほどいいです」

「わたしもアイーシャに賛成だ、マチルダ。君の言
い分もわかるがこのまま話していても不毛だよ。それ
にグランディーナは自分の希望は翻すまい」

「そんな、ランスロットさま」

「ブルートーンの騎乗鞍を外して板を乗せたらどう
だろう。このなかではいちばん安定していると思う」

「ギルバルドさま、あなたまでそんなことを仰るん
ですか？」

「グランディーナの言い分にも一理ある。諦めなよ。
その上で最善の策を出し合っているんじゃないか。俺
は板よりも誰かが抱いていつてやった方がいいと思
うけどな」

「でも、いま動かすと本当に危険なんですよ」

「くどいぞ。」

ウォーレン、彼女を連れて先に帰れ。バインゴイン
の方も心配だ。私の怪我のことは言っておけ。後から
騒がれるのも厄介だ」

「わしもともに帰ろう」

「大聖堂を経由せずに街道に沿って南下するとい
い。グリフォンに二人乗りでも多少はきつくはないはずだ」

「承知しました」

マチルダはまだ不満そうだったがアッシュがなだめ
るように連れていった。

その姿を見送った後で、ランスロットは思わずため
息をもらす。

「ため息つくぐらいなら、おまえも帰りや良かった
のに」

「わたしは彼女の騎士だ。そんなことができるか」

「別に気にしねえと思うけどなあ。だいたい何で
残った人数の方が多いんだよ？」

「君とギルバルドが帰っても良かったんじゃないの
か？」

「おまえ、俺に逆らおうつての？ 生意気だぞ、ひ
よっこ騎士のくせに」

「そういう君は鳥野郎と呼ばれてなかったか？ 仮

にも一国の皇子があんな汚い言葉遣いをするとは、ゼテギネア帝国も先はないな」

「同感だな」

「だがあの鎧兜が空っぽだった理由の説明はつかない。誰が動かしていたんだ？ そもそも、どうして鎧兜だけで動くんだ？」

「魔法のことを俺に訊くな。帰る前にウォーレンに訊いておけば良かったなあ」

「イービルデッドはともかく、鎧兜だけで動ける理由は彼にもわかつたとは思えないな。当人に訊いてみるのがいちばんいいのだろう」

「げえーっ、また会うのか？」

「そう予告されたからな。ああいう輩は敵にまわすとしつこいぞ」

「何だ、おまえ、心当たりでもあるのか？」

ランスロットが応えなかったので二人の会話はそこで切れた。彼がきつい表情をしたのでカノープスが追求するのを控えたせいもある。

「兄さん、ランスロット、何を油、売っているのよ。残ったのなら手伝ってちょうだい」

「手伝いつて言つたつてギルバルドとアイーシャとおまえがいれば十分じゃないのか？」

「遊んでいるのならクロヌスで帰つたらどう？ いまならまだウォーレンさんたちに追いつけるわよ」

「すまない、ユーリア。何を手伝えばいいんだ？」

彼女は素直なランスロットの答えに微笑んだ。

「買物を頼まれてちょうだい。食事と水、怪我人のために毛布もね」

「毛布？」

「今日はここで野宿よ。明日、私たちも街道に沿ってバインゴインに向かうわ。ふつうならばエレボスとワイバーンだから一日の距離だけれど、アイーシャは容態を見ながら進みたいって言うの」

「野宿っていうのもアイーシャの意見だろ？ よくあいつが聞き入れたな」

「一日おけば少しは良くなるだろうって、兄さんたちが遊んでいるあいだに説得したのよ」

「へいへい、俺が悪うございました。ところでギルバルドは何やつてるんだ？」

「アイーシャの手伝いよ。男が二人も残ったのに、すぐにいなくなっちゃうんだから」

「おーお、こいつはさつさとアムドに行った方が良さそうだな」

行くぞ、ランスロット」

「承知した」

「兄さん！」

それ以上ユーリアのお説教を聞いているわけにもいかず、ランスロットとカノープスは小柄なクロヌスに乗り、アムドに向かった。

「まったく兄さんも残ったら残ったで役に立たないんだから」

「グランディーナ殿のことが心配なのだろう。ああ見えて人一倍、情に厚い奴だ」

「でもギルバルドさまがお手伝いなさってるのに、元気の余ってる若人が働かないなんておかしいです」

ギルバルドが呵々と笑った。

「だからその分、わたしが働いている。わたしでは役不足か？」

「とんでもない！」

言いながらユーリアが頬を染めたので、アイーシャはやつと有翼人が人間の三倍ほどの寿命を持つことを思い出した。何しろ有翼人とともに話すのはこれが初めてだ。そうでなくても彼らはロシユフォル教会に滅多に來ないし、がたいの良さも人一倍、口を開けば言葉遣いは荒っぽいし、とかく女性が少ない。彼女にはお近づきになりたくない人種だったのだが、それだ

けにギルバルドとカノープス、ユーリア兄妹の良さが理解不能だったのだ。

それでつい、ため息が漏れた。めまぐるしい一日だった。昨日、トマヤングに着いた時はこんなことは予想してもみなかった。母の仇、ガレス皇子を討ったという高揚感も湧いてはこない。

「疲れた？」

「少しね。何もかも初めての体験だからよ。慣れれば、そんなことなくなるわ」

「無理しないでいい」

アイーシャは笑ってグランディーナの手を取った。

「あなたこそ無理しないで休んで。マチルダさまの言つたとおり本当に絶対安静の重傷なのよ。おしゃべりだつて厳禁なんだから」

グランディーナは素直に目をつぶつたが、その寝息は穏やかなものではなかった。アイーシャは思わずその手を握り締めたが、その途端、猛烈な吐き気に襲われ、口元を押さえた。目の前が一瞬真っ白になり、目眩さえる。

「どうしたの、アイーシャ？」

「いえ、大丈夫です」

「大丈夫じゃないわ。顔が真っ青よ。あなたも少し

横になつていたらどう？」

「いいえ、本当に大丈夫ですから」

原因はほかでもないグランディーナだ。彼女が何度も首を振った。

その苦しそうな様子にギルバルドも案じ顔に近づいてきた。

グランディーナが自分の意志を貫くだろうことはわかっていた。だがイービルデッドを喰らっていた時間はバインゴインでの比ではない。あの攻撃で若いヴィリーは殺され、リスゴーとシモンズは重傷を負わされた。彼女も無事だとして言えるだろう。

その時、アイーシャがさつきとは違った呪文の詠唱を始めた。だが頭はふらついて言葉も途切れがちだ。

「無理よ、アイーシャ。あなたも休まなくては駄目。その体調で呪文なんて唱えたら、あなたまで倒れてしまうわ」

「触らないでください！」

「ええ？」

「私たちに、触らないで。大丈夫、です、私は、倒れ、ませんから」

「アイーシャ！」

「手を出しては駄目だ、ユーリア。彼女の言葉を信

じなさい」

「でもギルバルドさま」

「続けなさい、アイーシャ。あなたに任せる」

力づけるような笑みにアイーシャは頷く。おかげで少しだけ勇気が湧いてきた。彼女は離れそうになっていたグランディーナの手を握りなおし、改めて浄化の呪文を唱え始めた。

「小娘風情が俺の邪魔をしようというのか」

「もはやあなたにその力はありません。去ってください、ガレス皇子。あなたに彼女は渡しません。私の命に代えても守ってみせます」

「貴様のような未熟者にこの俺が止められるものか。命に代えてもだど?! おもしろい、そいつの代わりに貴様の命をちようだいするぞ!!」

アイーシャが対峙したガレス皇子は真つ黒な影だった。鎧を身にまとっていないというのに人の姿でなく、ただの影にしか見えない。その影が数倍に膨れ上がり、彼女もろとも呑み込もうとした。悲鳴は喉の奥で凍りつく。本当に恐ろしい時、人は声さえ失うのだと彼女は知った。けれどアイーシャは両手を広げてグランディーナを庇った。

その時、二人のあいだに真つ白な光が広がり、ガレス皇子の巨大な影はあつという間に元の大きさの数分の一に縮んでしまった。

「うおおおおつ?! 何だ、これは? この俺が消えるだど? 誰だ、貴様は?!」

「お母さま?!」

アイーシャの記憶と寸分違わぬフォーリスが、振り返つて微笑んだ。涙があふれ、その身にすがろうとしたが、ガレス皇子の影と同様にその姿もまた、光でしかない。

「私を直接その手にかけしゆえとお知りなさい。ガレス皇子、あなたに娘たちを手にかけてさせはしません。お戻りなさい、人の身から切り離された哀れなお方よ。ここに居るあなたは所詮残骸でしかない。所在あるべきところの処へお戻りなさい!」

「俺を哀れむな! どうせ貴様は死者にすぎん!

この俺の邪魔をするな。どけ、フォーリス!!」

「いいえ、私はあなたを哀れみます。もはやあなたは哀れむしかできないお方です。去りなさい!」

「おおおおお!」

ガレス皇子の影が消え、声も聞こえなくなつた。だが同時に、あんなにはつきり見えていた母の姿もすぐ

に霞んできた。

「お母さま! 母さま、待つて! 私、まだ言いたいことが——」

「さようなら、アイーシャ。サーラと仲良くね」

「母さま!!」

「アイーシャ!」

視界に入つてきたのはギルバルドとユーリア、その後ろのランスロットとカノープスの顔だつた。

涙顔のユーリアがアイーシャを抱きしめる。温かい。だが母の光に温もりはなかった。母の死が再び実感されて涙があふれた。けれど彼女の手には、もう一人の温もりが感じられていた。

「グランディーナは?」

「生きているよ」

自嘲気味の口調だが、その声ははつきりしていた。

「グランディーナ、お母さまが!」

「知つてる。また、助けてもらつた」

そう言つた彼女の声は嬉しそうでもあり、寂しそうでもあつた。

「母さまの声が聞こえたの?」

彼女は頷いた。だから嬉しい。だけど寂しい。もう

会えない。もう一度会えた。間に合わなかった。また助けられた。グランディーナは空いている方の手で目の辺りを覆った。

けれど、その手の下から涙はこぼれなかった。

「泣いてもいいのよ。泣けるのはあなたの心が健康な証拠よ。泣くことを、泣いたことを、恥じてはいけないのよ」

「フォーリスさまのようなことを言わないでくれ」

しかし、その場の全員が思っていたとおり、彼女はやはり泣かなかった。

翌日、一行はアムドの郊外を発った。結局、カノープスの案が受け入れられた形となり、グランディーナと彼がエレボスに乗り、ランスロットとギルバルドがブルートーン、ユーリアとアイーシャがクロヌスに乗ることになった。

「苦しくなったら我慢しないで、すぐにカノープスさんに言ってみてね」

「わかつてる」

「甘いな、おまえは。こいつがそんなにおとなしく苦しいなんて言うもんか。いいか、俺の一存で止めるからな。素振りを見せたらすぐにだぞ。それと、俺を

呼ぶのにいちいち『さん』なんてつけるな、堅苦しい。呼び捨てでいいんだよ、呼び捨てで」

「わかりました」

アイーシャの返事にカノープスが歯を見せて笑う。

「良くできました。さあ、ぼちぼち行こうぜ」

エレボスの首にもたれていたグランディーナは、頭以外は全身がほぼ包帯づくめの上に血の気の引いた顔色が、いつもの彼女とあまりにかけ離れていて別人のようでさえあった。だが無言でカノープスを睨みつけた視線には殺気さえこもっていたようで、彼は気づかなかったふりをする。

それからしばらくのあいだ、カノープスは無言でエレボスを飛ばした。

トマヤングを過ぎると街道はじきに山裾を縫うように続く。アヴァロン島は平地がとて少ない。バインゴインとガントーク、アムドとトマヤングの周囲だけの猫の額のような土地が、人が利用するに足る平地である。タルジンは山間を開拓してできた町だし、マンガも元を質せば山の斜面に開かれた村が発展した町だ。だが、さすがのカノープスにもタルジンの町は見えてこなかった。すると、眠っているとばかり思っていたグランディーナが突然、顔半分振り返った。

「馬鹿正直に街道をたどるな。この高度ならもつと山に近づける。タルジンもマンゴも用はない。バインゴインに行くんだ」

「起きてたのか」

「当たり前だ。今日中にバインゴインに着きたいの呑気に寝ていられるか」

「それならそうと最初に言えよ。こちとらアヴァロン島なんか来るのは初めてなんだ。おまえのようなわけにいくか」

「ならばいまからでも間に合う。進路を修正しろ」

「やってるところだ。がたがた言うな」

それでグランディーナが沈黙したのでカノープスも言われたとおりにする。飛行して編隊を組んでいる時はいちいち進路変更の連絡などしないものだ。先頭の魔獣の進む方向にほかの魔獣が従う。そういう点でエレボスは先陣を切るのに適任である。

「起きてるなら聞かせろ。どうしてあんな無茶をしたんだ？」

「無茶？ あなたにはそう見えたのか？」

「おまえよりアッシュが先んじてたはずだ。それに
おまえなら一人でガレス皇子を仕留められただろう。
自分がイービルデッドを喰らって、ガレス皇子を俺た

ちに任せる理由はなかったはずだぞ。まったく、あれが無茶以外の何だつて言うんだ」

「さあ、どうしてかな」

彼女は相変わらず自嘲するような笑みを浮かべた。

しかし予想していなかった反応にカノープスの方が目をそらした。

「おまえ、まさかイービルデッドを一度喰らったことがあるんじゃないだろうな？」

「あるものか。もしもあつたら奴だつて手加減などしなかつたはずだ。そうなればさすがの私もやばい」

その言外の意味をカノープスは反芻する。

それで話が切れたと思つたのか、グランディーナはまた目をつぶった。

邪気のない寝顔だ、と言いたいところだが、先ほど自分が察した殺気は冗談ではないだろう。もしも強行的にエレボスを着地させるとしたら、こちらも命がけの覚悟をしなければなるまい。そんなことを考えて、カノープスは首を振った。

いまのグランディーナは丸腰だが彼女のことだ、たとえ素手でも的確に急所を突いてくるに違いなかった。だが、穏やかな寝息が聞こえてきて、さすがの彼も思わず胸をなで下ろす。彼女が言うように今日中にバ

インゴインに着くのが、結局のところ誰のためにもい
ちばんいいのだ。

けれど彼女が髪をまとめている白い手巾がどす黒い
血に染まったままであることに気づいて、カノープス
は胸をつかれた。髪にこびりついた血糊もほとんどそ
のままのようだ。傷のことはわからないが、あれは尋
常な出血ではなかった。

しかし親指を立てた手を差し出して、彼は後方に見
えるように動かした。これでほかの四人も少しは安心
できるだろう。手巾は下りた時に洗ってやればいい、
彼はそう考えたのだった。

「アイーシャ、グランデイナーのことを心配するの
もいけれど、あなたも気をつけなさい。鞍ずれば慣
れれば無くなるわ。でもあなたは魔獣に乗り出してま
だ二日目なんですからね」

「大丈夫です、ユーリアさん。グランデイナーが頑
張っているのに、私が弱音なんて吐けません」

ユーリアが案じたような顔で振り返って微笑む。そ
の姿にアイーシャは大聖堂の着色硝子にあつた天使長
の絵を思い出した。天なる父、ファイラーハ神の使い、
純白の翼は六枚を数える汚れなき至高の天使長、その

名をミザールと伝えられる。

「それは逆よ、アイーシャ」

ユーリアの澄んだ声音にアイーシャは現実引き戻
された。ミザールの名を聞いたのは母が生きていたこ
ろの話だ。それもオウガバトルの伝説同様、伝説の話
である。

「あなたが弱音を吐いてくれた方が彼女のためにも
いいの。休みは必要なのに、彼女はなかなか言い出さ
ないわ。表にも出さない人だから、きつと兄さんも気
づかない。だけどあなたが休みたいと言えば話は別、
彼女は望まずして自分も休めるのよ」

「でも、カノープス、さんが自分の一存で止めてし
まうぞって言っていましたよ」

「ならば彼女は気づかれまいとするでしょうね。た
とえ気づかれたとしても、本気で兄さんを止めようと
するかもしれないわよ」

「だけど今日中にバインゴインに着けなかつたら明
日の船に間に合いません。ディアスポラ行きの船はま
た七日待たなければならぬです。きつとグラン
デイナーは知っています。だから、どうしても今日中に
バインゴインに着きたいんです」

「それは本当なの？」

「はい。私がディアスポラからバインゴインに着いたのが白竜の月十五日ですから」

「どうしてそんな大事なことを言わないのよ！」

「ご、ごめんなさい！」

ユーリアが手綱を駆り、クロヌスはエレボスに接近した。

「ユーリア？！ 何、無茶やってんだ、危ないぞ！」

「アイーシャ、船は明日のいつごろバインゴインを発つの？！」

「お昼ぐらいです！」

「何の話だ？」

「兄さん、明日の昼ごろ、バインゴインからディアスポラ行きの船が出るわ。それを逃したら次の船は七日後、私たちはアヴァロン島に足止めされるのよ！」

「馬鹿野郎！ 何でそういうことを先に言わねえんだ！ 知ってればウォーレンたちに足止めさせるとか手の打ちようもあるだろうに」

「もうしてるはずだ」

「何だと？」

「そのために先にウォーレンを帰した。気づかないようなら無能者だ、首にしてやる」

「ほんととかよー」

グランディーナの言葉にカノープスとユーリアは大きなため息を吐き出し、カノープスなどは騎乗鞍にもたれかかった。もちろんアイーシャも安堵のため息をそつとつく。

蚊帳の外に置かれたランスロットとギルバルドが突然の騒動にどうしたのか訊いている。

「ユーリア、おまえが説明してくれ。エレボスをあちこち動かすと都合が悪いからな。」

「だけどもおまえもおまえだ、俺たちに話さないなんて意地が悪いぞ」

「だから急がせた。船がなければアヴァロン島から出られない。急いでも意味はあるまい。そのあいだに帝国はディアスポラから来られる。このアヴァロン島で守りきれれると思うか」

カノープスはじと目で睨んだが、グランディーナは相変わらず意に介さない。だが彼女にしては珍しく、こんな言葉を付け加えた。せめてもの罪滅ぼしのつもりだったのだろうか。

「もう少し私を信用しろ。意味もなくあなた方を急かしたりはしていないつもりだ。話す必要などないから話さなくていいと思った。それでは駄目なのか？」

「いや、悪くねえ」

カノープスの顔に笑みが戻る。その紅の翼が大きく広げられ、両手が振り上げられるのは少し離れたランスロットたちにもはつきりと見えた。

「何をやっているんだ、カノープスは？ あんなことをしたらエレボスが平衡を崩す」

「大丈夫だろう」

「何を根拠にそんなことを？」

「エレボスはカノープスの気性を知っている。ユーリアとともに卵から育てたのだ。あれぐらいのことで平衡を崩すはずがない」

「ではなぜ彼はあんなことをするのだ？」

「よほどいいことがあつたのだろう。あんな彼を見るのは二五年ぶりだ」

「ギルバルドさま！ 見てください、兄さんが」
彼は微笑みながら頷いた。

ユーリアが涙をこぼすのをランスロットはまぶしく感じる。この三人の絆は彼にはとうてい理解しがたいところだ。幸か不幸か、ランスロットは傭兵生活の長かったこともあって心許す友がない。ウォーレンは歳が離れているし、友と言うより同志だ。アッシュは尊敬する元騎士団長であり現在の彼の目標でもあるが友にはなり得ない。アレックやロギンス、年若い友と

そのようなつき合いをしたことはない。心を開いただろうか。閉ざしただろうか。だが彼らにとつてランスロットがそのような存在でないのは間違いない。リスゴー、ガーディナー、バーンズ、歳は近いが友と呼べるほどではない。唯一、心許せる人であつた妻は二年も前に死んだ。不思議なものだ。いままで友のことなど意識したこともなかつたというのに。

「わたしはあなた方がうらやましい」

「うらやむ必要などない。あなたもともに喜んでくれればいい。カノープスもユーリアもわたしもあなたを待っている。共有してきた時間に違いはあつても、解放軍とともに過ごす時間はその隙間を埋めてくれるだろう。この戦いのなかで、我々はそれほど濃い時間をともに過ごせるだろう」

「ありがとう、ギルバルド」

ランスロットは礼を言うのがやつとだつた。

夕刻、一行はバインゴインに到着し、ウォーレンやアッシュら、リーダーたちの出迎えを受けた。

ところが、ウォーレンが何か言うより早く、デネブが飛び出してきて、グランディーナの首根っこにしがみついた。

「どうしたのよ、グランディーナ?! ガレス皇子相手にこんな傷を受けちゃったの? そうとわかれば、あたしがついていってあげれば良かったわ。でもねえ、ところでこんな話があるんだけど、どう? いまなら出血大サービスよ」

皆をそつちのけでいきなり自分だけの世界に突入したデネブをカノープスが腹立たしそうな顔で引き離そうとした。彼女のささやきに耳を傾けるグランディーナもグランディーナだ。皆の苦勞をいたわるでなし、デネブといちやつくのなら二人きりの時にしてほしいものだ。

だが思いがけず、それを止めたのはグランディーナだった。彼女は怒ったような視線さえ向けて彼の手を押しとどめると、勝ち誇った笑顔を見せるデネブの頭を自分の方に向けて、人目もはばからず濃厚な口づけを交わした。当然デネブがこれを拒絶するはずもなく、互いの唇を吸い合う音さえ聞こえて、その場に入った全員がしばし凍りついた。

どれくらい時間が経つたらろう。

不意にデネブの腰が砕け、二人は自然と離れた。グランディーナが手を伸ばさなければ、彼女はそのまま地面に倒れていただろう。

グランディーナはエレボスを飛び降りた。力を失ったデネブを抱き上げたところは、とうてい瀕死の怪我人の姿ではない。

「無茶をするな、デネブ」

「あなただからあげたのよ。元気になって良かったじゃない」

「デネブ!」

その声にただならぬ事情を察してウオーレンとマチルダ、それにアイーシャが近づく。

魔法のトンがり帽子が転がり落ちた。

「いったいどういうわけです? 彼女は何をしたのです?」

「話は後だ。マチルダ、アイーシャ、デネブを診てやってくれ!」

魔法の白い顔は白蟻はくろうのように血の気がない。呼吸の間隔も長い。手も身体も冷たく、委ねられたマチルダは、これで彼女が生きているのかとぞつとするような気持ちだった。

だが、てつきり気絶しているかと思ったら、デネブは目を開け、しつかりした口調で言った。

「呪文は効かないから要らないわ。休ませて、ゆっくり寝かせてちょうだい」

マチルダがグランディーナの顔を伺うと彼女は同意するように頷いて付け加えた。

「身体が冷え切ってる。暖めることを忘れるな。本当は人肌がいいんだ。添い寝してやってくれ」

「えっ?!」

マチルダは引いたがアイーシャが頷いた。

「私が入ります。グランディーナを助けてくれたんでしよう? どんな恩も返しつくせるはずがないもの」

「ありがとう、アイーシャ。頼む」

「行きましょう、マチルダさん」

「わたしが手伝おう。その方が速い」

「ありがとうございます」

ギルバルドがデネブを抱き上げ、マチルダとアイーシャに誘導されていった。

それを見送ってからウォーレンが咳払いをする。

「ランスロット、マントを買っておきました」

「ああ、ありがとう、ウォーレン」

だが、グランディーナを振り返ったランスロットは、またしてもマントを自分のために使えなかった。彼女の包帯がほころびはじめ、半裸になりかけていたからだ。彼がマントを差し出すと彼女は意外と素直に受け取った。

「何があつたのか説明してくれ、グランディーナ。まさか君もそれは拒むまい?」

「私の知っていることで良ければ話そう」

あるかないかもわからないような微笑を浮かべてマントを自分の身体に巻きつけなおすと、グランディーナはまず座った。

「どういうことだ? 俺にはちつともわからん」

「怪我は治ったんですか?」

「ほとんど治った。支障はない」

「まさか、デネブが? さつきはいつたい何があつたんですか?」

「デネブが私に言ったんだ。傷を治したかつたら自分の生気を使えと。ただし生気は口移しじゃないと伝わらない。口づけ限定だそうだ」

「口づけはともかく、生気で傷が治るのか?」

「そういうことになるな」

「そのような魔法は聞いたこともありません。相手の生気を吸うならともかく、自分の生気を分け与えることができるなど」

ウォーレンがいささか興奮気味に断言した。もつともこういう事実を見せつけられた場合、特に魔法に詳しくない者は敢えて否定する気にもならない。

しかも得体の知れない存在とは言え、デネブは高嶺の花だ。傷や生気は右に置いておいても口づけできる者ならしてみたいと願う男性陣も少なくない。しかし、誰も実際に交際を申し込む度胸がないのもデネブならはだ。

「私が知ってるのはそれだけだ。ところでウォーレン、乗船の準備はできているのだろうか？」

「何人かはまだアヴァロン島に残らねばなりません。明日の船には間に合います」

「ありがたい。明日はディアスポラ行きの船に乗る。解散して休め。ウォーレン、残る者の名を教えてください。それとリスゴーとシモンズには会えるか？」

「お待ちしておりました。ですが、その前に着替えてください。その格好ではロシユフォル教会には入れません」

「そうだな」

解放軍がバインゴインの港からディアスポラの港、ルテキア行きの船に乗ったのは翌日、白竜の月二二日のことである。

アヴァロン島に残ったのは除隊の決まったリスゴーとシモンズのほか、騎士ユーゴス・タンセと騎士ス

ティングだった。それに八人もの戦士が除隊になったので三日間の船旅でグランディーナは部隊の再編制にしばし頭を悩ませる羽目になった。

四頭のグリフォンはギルバルドに預けられ、魔獣部隊所属となり、マチルダを助けた司祭のモームはそのままマチルダの下にいたが、部隊の方はそう簡単に済まなかったのである。

一方、倒れたデネブは、アイーシャの手厚い看護もあつてディアスポラに着くところに起き上がれるようになった。何を話したのか、デネブはアイーシャがすっかり気に入ったようで、彼女も魔女とうち解けていた。

白竜の月二五日、船は予定どおりルテキアの港に入り、皆は順調な航海だったことを喜んだ。

ディアスポラは、ホーライ王国時代にはゼノビアとマラノを結ぶ交易路として、またアヴァロン島を挟んでカストラート海、カストロ峡谷を挟んでその先のパラティヌス王国にも繋がる中間地点として栄えた地方である。

だがそこには大監獄があり、ゼテギネア帝国の代になつてからは政治犯ばかり収容されている。

その監獄長を務めるのはノルンIIデアマート、一時は帝国教会の法皇にまで上り詰めた女性にはここに左遷されたという噂さえあつたが、解放軍の名を聞いて即座に討伐を命じた。その真意はどこにあるのか。帝国との戦いはいよいよ本格化しようとしていた。